
流星のロックマン～エレメント～

瓜坊主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン〜エレメント〜

【Nコード】

N9484R

【作者名】

瓜坊主

【あらすじ】

ディーラーを倒し、スバルたちは近くのコダマ中学高に進級して、やっとの思いで手に入れた平和時間をかみしめていた。こんな日々が毎日続くと当たり前のように誰もが思っていたがそれは大きな間違えだった。

地球に4度目のききが迫っているのに気づいている人はだれもいなかった。

スバルたちは新しい仲間と協力して地球を守ることができるのだろうか？

今度の相手の組織の名前は？そして目的は何なのか？

プロローグ（前書き）

初めまして瓜坊主です

初めての作品なので上手くかけるかわかりませんがよろしく願います

ブローグ

く????（とある惑星）

コンコン、失礼します。

黒いフード付きのコートをきた男が真つ暗な部屋に入ってきた

「……様！ご報告があります。我ら……が長年探していたプログラムは地球にあることがわかりました。ですがあいつが我らからうばったときはちがいがバラバラになってしまっていてそれぞれがどこにあるかまでは……」

すると暗い部屋から返事がかえってきた

「そうか……地球にあるのか……」

さがすしかあるまい、あれは我らの復讐にはなくてはならんだ。」

「そのとおりです。そこで提案があります。日本にありますWAXAになら何処にあるかの情報があるかもしれません。」

「……なるほど、いい考えだな……と……に伝える。」

明日の昼日本のWAXAに侵入して情報を手に入れてこいと……
後、例の二人と地球を救ったとかいうロックマンとかいうやつもきになる。その情報もあるようならもっててこいと。」

「わかりました。では失礼します。」

男は謎の男に敬礼し部屋を出て行った。

「……人間たちよ平和な時間は終わりだ。我らは今までの奴らとはちがうぞ！どうする？」

フッフハハハハハハハ

真っ暗な部屋にはしばらく不気味な笑い声がひびいていた

プロローグ（後書き）

これからもっとがんばっていきます

感想もよろしくお願いします

目覚の朝（前書き）

タイトル考えるのむずかしいですね

目覚の朝

目覚の朝

コダマタウンのとある家でウィザードは頑張っていた。

> お……きろス……遅するぞ……おい起きろ<

彼の名前はウォーロック。AM星で生まれたFM星で育った見た目は乱暴そうだがとても優しいやつだ。

> おい起きろって、おいスバル<

「ん、んー今何時？後30分寝かして」

> はあーその言葉2回めだ

ぞ、後5分であいつ等が来るぜ<

「つつえーやばい寝坊したー」

ごめんロック<

> いい加減自分で起きろって<

バタドタドタ

> って聞いてねえぜ<

「おはよう父さん、母さん」

「おはよう、早くご飯食べないと委員長さんたちきちゃうわよ」

「わかってるよ、中学生になる初日から遅刻したら殺される」

スバルは猛スピードで顔を洗い今は学校に行く準備をしている

「おはようスバル、ロックいつもわるいな」

> 本当だぜ、まったく俺の気持ちを考えろよ<

大吾は玄関で靴履きながらウォーロックとはなしていた

「今度ロックの好きな刑事ドラマのDVDかってやるから、じゃいつてくるよ」

> 頼んだぞ<

「スバル早くしなさい」

ピンポン

「ほら、早くいつてらっしゃい」

「行つてきまーす。みんなおはよう」

「おう」

「おはようございますスバルくん」

「おそい！初日から遅刻とはいいい度胸ね」

上から体がでかく牛井が大好きな牛島ゴン太、身長がちいさいが知識の量は誰にも負けない最小院キザマロ、小学校のときにクラスで委員長をやっていた白金ルナだ6年のときに生徒会長をしていたのになぜかみんな委員長とよぶ。

「すいません、委員長」

委員長から黒いオーラがではじめたのでスバルは土下座してあやまつた。

「わ、わかればいいのよ。っさ、みんな行くわよ」

「「「はい」「」」」

学校に行く間での道のりはぐだらない話をたくさんした。

目覚の朝（後書き）

感想もよろしくお願いします

転校生（前書き）

遅くなりました

今更だけど、「」は人の話しくくはウィザードで（）は心の声です

転校生

コダマ中学はスバルの家からは10分くらいのところにある。

委員長たちとくだらない話をたくさんしたのであつという間についてたきがした。

コダマ小学校から中学になったといつても人は全然かわつてはいなかった。

「早く自分たちのクラスをみつけましょ？クラスの委員長をねらうものとして初日から遅刻なんてできないからね！」

最期の方がやけに自分のほうをみていたがスバルはきにしないようにした。

ぐううー

「腹へったぜ！！」

「なにいつてんですかゴン太くん！まだ学校始まつてもいけませんよ！！早く自分のクラスさがしてくださいよ……つてここにいる全員同じクラスですね！」

「……本当だ（ね）……」

「あれ、みてください。ぶくたちの3組だけ人数がすくないんですよ！他は35人くらいいるのに？」

「それなら俺しつてるぜ？転校生つてのがくるんだよ」

「なんでロツクがしつてるのさ？」

「それはなあーあい……」

キンコンカーンコンキンコンカーンコン長い間クラス表の前で話していたので見事に遅刻を知らせる鐘がなつてしまった。

「……やばい、遅刻だ……」

「俺の話しきけよ！つま後で嫌でもわかるけどな！<ドタドタドタ」

「僕たちのクラスはどこですか」

ペディア？」

<ピピツこの階の一番手前だよ！キザマロくん<

「ありがとう！ゴン太くん頑張ってください！」

「俺もうダメだー」

「だらしないわね！ここまでがんばりなさいよ！」

そっぴいながら教室に入ると先生はおらず、自分の席につくとちよ
うど先生が教室に入ってきた。

「みんなおはよう。今日からまた君達の担任の育田道德だ！よろし
く」

なんと入ってきた先生はこのクラスの全員が知っている小学校のと
きの担任だった

「な、なんで先生がここにいますか？」

みんなが思っていることを委員長が聞いてくれた

「それはなあー白金、俺は中学の教員資格ももっていてな、人が足
りないということで小学校から応援にきたんだよ。わかったか？」

「そっぴいことですね。これからよろしくお願いします。」

これにはなんと全員が驚いたがみんな心から喜んでいた。

「俺の自己紹介はいらないとして……これから転校生を紹介する。

おーい、入ってきたくれ。」

ガラガラと音をたててドアを開けて入ってきたのは5人だった

「もう1人いるが多分みんな驚くから待っててもらって、順番に自
己紹介してくれ」

「みんなひさしぶり！双葉ツカサです。これからまたよろしく」

「まず、あの時はみんなに迷惑かけてごめん、これからよろしくな
！」

最初の2人は小学校のときにクラスが同じだった。

1人目が緑の髪の毛をした女の子のような子でヒカルというもう一
つの人格を持っていたのだがヒカルは自分を捨てた親をにくんでい
て人間全員に復讐しようとしていたが今は和解してなぜかジェミニ
を再構築したときにジェミニと合体してしまった。

2人目が元ディーラーのジャック

スバルと出会い彼は優しくなりスバルがメテオGを破壊したあと彼はスバルをディーラーの基地から探してくれた。

「はじめまして氷瀬ゆきなです。よろしくお願いします」

3人目の氷瀬さんは明るい感じで髪は少し茶色で肩くらいまでのばした女の子

「はじめまして雷道ひろきです。よろしく！」

4人目は髪の毛は短いのだが全体的にツンツンしている男の子

「はじめまして水野ヤスつて言いますよろしく！」

5人目は髪型は少し長めの坊主

身長が少し高くいかにもスポーツマンって感じた

「よし、最後の子だがみんな騒ぐなよ？入ってくれ」

「こんにちは、ベイサイドシティーから転校生してきた響ミソラです、みんなよろしく！」

「……ええー……」

「はあーやつぱり無理だったか……すまん響」

「ハハッ、大丈夫です」

これにはクラス全員がおどろいた

なんたつて知らない人は誰もいないというくらい人気のアイドルが転校してきたのだから……

「おいおい静かにしろ！それぞれの席だが希望はあるか？」

「はい！私スバル君の隣がいいです」

「つえ、僕？」

次の瞬間男の子たちの殺気がとんできたビビったが一番恐いの朝とは比べものにならないくらいのおーラをだしている委員長だった。

「よろしく！スバル君」

「え、あ、よろしく！」

（やばい、めっちゃにらんでるよ……どうしょ）

こうしてスバルの学校生活がまくおあけたのだ。

その頃WAXAでは……

<…… あったぞマグマ！あれがメインコンピューターだ<

<ここにあるはずなんだが…… あったぞ！もうここによつへないくぞエレキ！こいつらがおきるとめんどうだ<

なんと隊員たち全員がその場で倒れ動かない…… ウィザードたちも同じだった。

<WAXAもたいしたことねーな？

日本の中心とかいってよ！

次はどこいくんだ？帰んのかマグマ？<

<そのつもりだったが…… コダマ中学校に星河スバルがいる……

やつがこれからの計画にじゃまならば……<

<了解！ひさしぶりにあばれるか

<

転校生（後書き）

感想待ってます！

水雷の来訪者

今はこの日の最後のHRでこれが終わったら下校である。今はクラスの委員長や目標などを決めている。委員長は1分もかからずに決まったが……クラス目標が決められないのだ。

くスバルく

「なんでしてたならいってくれなかったんだよロック？」

くよくゆうぜ！さっき言おうとしたら聞かずに走ってつたる？く

「ははは、……ごめんロック」

くミソラく

「はぁーどうしようハープ、やっぱり言った方が良い……よね？」

くポロロン、そりやそうよそのために転校したんでしょ？く

「そうだけどーいざとなると緊張しちゃって……」

くロックはあたしが引き受けるから今日の夜展望台にでも誘っていいつちやいなさいよく

「うーん……よし！後悔したくないし今日いうよ」

くポロロン、そのいきよ！ミソラ

く

く水野、雷道、氷瀬く

「つつ！ーヤス、ひろき、マグマとエレキがWAXAからこっちにむかつてるー！」

「ああ、今WAXAの防犯カメラの映像みてみたけどみんな眠らされてんな……」

「……どうするよヤス？」

「一応ゆきなは戦闘に参加しないで校舎と生徒まもって。ひろきは俺と一緒にスバルたちが負けそうになったら戦闘に参加しよう？まんがいちってこともあるし」

「ヤス！いくら奴らがコクーンと電波変換してても無理だろ？あいつらまだ力の存在にも気づいてないし」

「しょうがないでしょ？まさか今日くるとはおもってなかったしウオーク準備しといて」

そう言うのと薄い水色の毛をした狼みたいのがてできて返事

「わかったよつとく」

「だそうだ、ライアンいくぞ？」

そう言うのと電気をおびたライオンのようなウィザードが返事した。
「いつでもいぜ！く」

「後5分でくるよ？ヤス、ひろきアイルいける？」

今度はペンギンのようなウィザードがてできた

「もちろん」く

「えークラス目標は先生の名前にちなんで……」

み「みんなで

ち「力をあわして

の「のりきる

り「リンクしたクラス（つながっている）

で良いわね？」

「「「賛成！」「」「」

「じゃみんなかえるわよ？起立、

気をつ……」

ドカアー……ン

「な、なんだいまのは？校庭のほうか！？みんな教室にいなさい！
白金たのむぞ！」

「わ、わかりました。」

くおいっ！スバルやばいぞ！今の爆発校庭にいる変な周波数の奴が
らだ！……く

くポロロン、それも多分かなり強いわく

「行くよ？ロック！トランスコード、シューティングスターロック
マン」

「私もいく！トランスコード

ハーブ・ノート」

「俺もいくぜ！トランスコードジャック・コーヴァス」

「僕もいくよ！トランスコードジェミニ・スパーク」

「俺もいくぜ！腹減ったけど……」

トランスコードオックス・ファイア」

「委員長ごめんいつてくるね？」

「みんな無事に帰ってきなさいよ！？じゃないとしようちしないからね」

「わかってるよ」

〈校庭〉

校庭では黄色い体をして背中にたいこのようなのを6個くらいわにしたようなのをつけているやつと体が真っ赤でてくびには火がでているリングをつけて背中にはおっきな剣をしょっているのがいた。

＜オラオラ！！星河スバル！早く来ないと校舎がなくなるぜ？＜

バチバチバチバチ

黄色い体の奴が手のひらに電気のようなを出して言った。

＜………来たか＜

「やめろ！誰だお前たちは！？」

＜人に名前聞くときはじぶんからなのるべきだろ？まあいい俺はエレキ。つでこの赤いのがマグマだ。星河スバル＜

「なんでスバルのなまえしってるんだあいつ？」

＜星河スバルは俺がやる。エレキは雑魚をたのむぞ＜

くったくわかったよマグマ＜

くくるぞスバル！＜

水雷の来訪者（後書き）

今日は頑張ろうと思います。
感想よろしくお願いします！

予想通りの戦い（前書き）

初バトルです！！

予想通りの戦い

「ブロロオ、何であいつスバルの
名前知ってたんだ？知り合いか！？」

ゴン太がそんなばかなことを言っていると10メートル以上さき
にいたエレキの姿が突然消えた。

「それはなあーでつかいの！！WAXAのメインコンピュータで調
べたんだよ！<

「どこにいったあいつ？」

「つつ！ゴン太後ろだ！！」

ツカサがゴン太に教えたときにはもうおそかった。

「おせーよ！スパークハンド<

エレキはゴン太の後ろから手のひらに電気をためてあったのを押し
付けた。

「ぐ、ぐわあー」

バチバチバチバチ……ドサッ

オックス・ファイアは膝から前に倒れこんでしまった。

「……ゴン太

（くん）！！「……」

その場にいた全員が名前を呼んでもゴン太は少しも動かなかった。

「なんだよ！丈夫そうなのは見た目だけかよ？<

そういいながらエレキは電波変換がとけたゴン太を足で踏みながら
いった。

「スバル」

「ゴン太ッ！バトルカードロングソード！！」

スバルは左手を長い剣に変えてゴン太を踏んでいるエレキのところ
に行こうとして周波数をかえた。

ガシッ

「お前の相手は私だ！！<

いきなりロックマンとエレキのあいだにマグマが入ってきて素手でロングソードをにぎっていたのだ！

<っち！なんて速さだよ……

スバル剣を捨てろ！！<

ウォーロックがそうさけぶとロックマンはマグマときよりをとった

「どうしたのロック？」

<……あれをみてみるよ<

言われるままにマグマの方を見るとスバルの持っていたロングソードが赤くなり、鉄のように溶けてしまった。スバルは自分が持っていたらと考えたら震えてしまった。

「……ありがとう、ロック」

<良いってことよ！それよりあっちの応援は無理だな！<

「うん、あっちは任して集中しよう」

くミソラたちく

「くそっつ！WAXAに連絡しても応答がねえ……おめえなにしたんだ？」

<あいつ等なら今頃おねえしてるぜ？ハッハッハ<

「ふざけやがって！！」

「ジャック落ち着いて！まだ本当かどうかわからないよ！」

「そうだよ！あのWAXAがやられるわけないじゃん！」

<俺と戦えばわかるだろうよ？俺らの強さがよ！<

「ハープ・ノート！！あいつの動きを止めて！！」

「了解！！マシンガンストリング！！」

ハープ・ノートは自分の持っていたギターの先から弦を飛ばしてエレキにまきつけた。

「今のうちだよみんな！！」

「いくよ！ヒカル！」

「任せとけ！本当の電気つてのをおしえてやるよ！！」

「ロケットナックル！！」

「エレキソード！！」

まずジェミニWが自分の拳をエレキ飛ばし、次にジェミニBがエレキソードできりつけた。

エレキのまわりには土煙が上がっていてよくわからない。

「ペインフレイム」

今度はジャックが紫色の炎をぶつけた

「とどめのシヨックノート!!」

ハープ・ノートがエレキを縛っている弦に音符をながした。

「やったか？」

土煙がすこしはれたところで声が聞こえた。

「なんだよ、こんなもんか？」

次の瞬間エレキを縛っていた弦を伝って電流が流れてきた

「つつえ! キヤアアー」

バチバチバチバチ

ハープ・ノートはもろにそれをくらってしまい電波変換がとけてしまった

「ハープ・ノート!!」

「人の心配する余裕あんのかよ？」

なんとエレキはジェミニWの目の前にいた。

「つつ!」

「これが本当のエレキソードだろ？」

「ザシュツツ…バチバチバチ」

ツカサはすきを疲れそのまま声を上げることなくその場に倒れてしまった。

エレキのエレキソードはツカサたちの違い「ソードが電気を帯びている」電気だけでできていた。

「ツカサツツ!」

「次はおめえだよ? 黒いの!」

エレキはヒカルの目の前でエレキソードを構えていた。

「くそがつつ!」

それをなんとかギリギリのところかわす。だが、エレキは笑って

いた。

バチバチバチバチバチ

「な、なん……で……だよ？……た……しかに……よ……けた……だろ？」
ドサツツ

＜電気つてのは決まった形がねーから長さかえれんだよ。後はおめえだけだな？鳥やろう＞

「くそがつっ！ペインフレイム」

＜だから何度も同じこといわせんなよ？スパークハンド！！＜
ぐ、ぐわぁー

ジャックはそのまま地面に落ちていった。

くスバルく

＜逃げてるだけじゃ私は倒せんぞ！？＞

マグマの言う通りスバルはさっきからずっとにげていた。

「つく！バトルカードダブルストーン！」

スバルは大きな岩を2つ出現させてその後ろに隠れた。

＜そんな岩に隠れてもすぐ溶かしてやる！＞

マグマがそういいながら岩に手をおくと

「バトルカードボムライザー！」

ドカアー

物凄い音と一緒に岩が爆発した。

＜やったか？＞

「もろにくらったとおもうけど」

＜誰をやったと？＞

「な、なんで？」

ドスツツ！

なんとマグマは無傷だったのだ。

マグマは背中に背負っていた大剣でロックマンをぶっ飛ばした。

「く、体が動かない！」

スバルは何とか膝をついている状態だった。

＜残念だったな？今のお前等じゃ”自然の力”をコントロールして

いる私たちには勝てない。だがお前たちは才能があるようだ……特に星河スバルと響ミソラは我々の計画を妨げる才能を持っているようだ……二人にはここで消えてもらおう。エレキ！響ミソラを始末しろ！！<

<わかったよ。さよならだお嬢ちゃん<

マグマは大剣を振り上げ、エレキは手のひらに電気を集めた。

（やめろ！動け、動けよ！ミソラちゃんを助けなくちゃ！大切な人なのに！何で動かないんだよ！力ってなんなのさ？）

>>さよなら（だ）若き戦士よく<

<スパークハ……<

>ブレイクソ……<

「アクアバレット！！」

「ライトソード！！」

ドッ、ドッ

カキーン

>>何者だ（誰）？<<

「動けない男の子（女の子）にとどめをさすのはどうかとおもうよ？マグマ（エレキ）！？」

そういいながら現れたのは全体的に水色の体をして大きなしっぽがついているロックマンのようなすがたおしている電波体と薄い黄色のからだで首のところは茶色のライオンのような電波体が現れた。

「誰？味方？」

「安心して！！スバルくん僕は君の見方だよ！」

>まさかお前もここにいたとはな？アクア・ウォーク、嫌、

水野ヤス！<

「久しぶりだな？マグマジジイ！まさかこんなに早くくるとはおもわなかったぜ？ゆきなのおかげだな！つかお前の仲間、俺の相棒にやられてるけど……大丈夫？」

>コクーンと電波変換した状態じゃ元四天王には勝てないか……エレキ！ここは引くぞ！<

> 覚えとけよ？このかりはかならずかえすからなく

そう言い残すとエレキとマグマコダマ中のグラウンドから消えていった……

「さてとひろき！ゆきなと合流しよう」

「スバルたちはどうするよ？」

「とりあえず先生たちにもう安全だっていって病院につれてこよう」

予想通りの戦い（後書き）

やっぱりバトルは難しいですね。
頑張ります。

感想よろしく願います！

お説教（前書き）

遅くなつてすいません！

お説教

マグマとエレキがさってから1時間近くたっていた。あの場において戦っていた全員が意識を失っていたので、みんなは保健室で寝ていた。

「ほんとに良かったのか？ヤス」

「しょうがないだろ！？保険の先生が平気って言うてんだからよ？」
「でもよースバルなんかマグマの大剣くらってんだぜ？レントゲンとかいらねえの？」

「大丈夫だろ！？いてえーつつたら行けばいいんだよ」

「そりゃそうだな。」

コンコン

「失礼しまーす。ってヤスとひろきだけか……先生は？」

「だけとは何だよ！だけとはよ！？」

「冗談よ冗談！！お疲れ様！」

とゆきなは笑っていた。

「ありがとう。って、学校はどうするって？」

「帰りのHRで言われたけど明日からの木曜日と金曜日はやすみだ
って」

「こんだけグラウンドはともかく校舎もこんだけ壊れたらしょうが
ねえーか」

ガシツツ

「すいませんでしたねえー？校舎を守れなくて！？」

ゆきなは笑いながらヤスの首をしめていた

「ギブ、ギブ！！冗談だよ」

ヤスの顔が青く、なっただのでゆきなは手をはなした。

「相変わらず仲いいね？じゃまならでてきますけど？」

「な、なにいつてんのひろき！！」

「そ、そうだぜ！なにいつてんだよ」

2人はひろきの言葉で顔を真っ赤にした。

「冗談だよ！」

「ひろき……！」

「う、うーん……ここは？」

ヤスたちが話しているとスバルが起きた。

「調子はどうだ、星河くん？」

「氷瀬さんと水野くんと雷道くん？ここは？」

「ヤスでいいよ。ここはコダマ中学校の保健室だ。」

「俺はひろきつてよんでくれ。星河くん達はエレキとマグマと戦って……」

「スバルでいいよ。……そっか負けちゃったんだ。みんなは？」

「怪我してるけど命に問題はないわ」

「そっか……よかった。」

そう言うときスバルはしたを向いてしまった。

コンコン……失礼します

その時、ちょうどキザマロをつれた委員長が入ってきた。

「大丈夫なんですか

（なの）？スバルくん……！」

「うん、ありがとう委員長、キザマロ。」

スバルは笑いながらお礼を言ったがいつもの元気はなく、すぐに下をむいてしまった。

「えーと……白金さんと最小院くん？」

「委員長でいいわ。」

「キザマロでいいですよ。」

「……委員長とキザマロ。僕達はジュースでも買ってくるからスバル君達をたのむね？……行こうひろき、ゆきな」

「うん（おう）……！」

「ありがとう。水野くん、氷瀬さん、雷道くん」

「ひろきでいいよ。」

「やすでいいって。」

「ゆきなでいいわよ。」

ヤスたちは気を使って保健室からでていった。

しばらく沈黙が続いたが委員長とキザマロはなんて声をかけて良いかわからなかったがスバルが口を開いたのだ。

「……委員長、キザマロごめん……僕は……みんなを守ることができなかった。……僕は目の前でやられている仲間の声を聞いても……助けられなかった。」

もし、ヤス達が助けてくれなかったら……みんな……みんな殺されてた!!」

「……スバルくん」

スバルは震える声で下を向きながら自分にかかっている布団を力いっぱい握りしめながらいった。

「

「僕たちは負けたんだよ……もうどうしていいかわかんないよ!

」

（（（スバル……）））

実はみんなスバルが話し始める前に起きていたが気まずくて起きれないでいた。

「いつまでもくよくよししないの!!」

「委員長……」

「確かにあなた達は負けたわよ!でもみんな生きてるじゃないの!ゴン太だって、ジャックだって、ツカサくんだって、ミソラちゃんだって、スバルくんだって、みんな生きてるじゃないの!!一回くらい負けたからってなによ?もう終わりなの?違うでしょ!!生きて帰ってくれば強くなれるのよ!あなた達はそうやって強くなってきたんでしょ!!」

「そうですよ!今までだってそうやって僕達を助けてくれたじゃないですか!」

「……ごめん!そうだよな?

ありがとう委員長、キザマロ」

「ブラザーなんだからとうぜんでしょ！」

スバルは委員長たちにいつもとおなじような顔をしてお礼を言った。そこにヤスたちが帰ってきた

「話は終わった!？」

「ええ、ありがとう」

「じゃあ僕達からの話をきいてほしい。みんなもう起きてんでしょ!？」

ヤスが保健室で寝ていた人たちに言うときみんな笑いながら起き上がった。

「み、みんな!!気づいてたの？」

「ちよつと気まずくって♪」

>まったく、落ち込むなよな?スバル<

「う、うるさいなロツク!!」

「ええーと話つてのは、ここにいる全員、明日WAXAに来てほしい。」

「っあ!姉ちゃん達は大丈夫なのか？」

「安心して!!WAXAの人たちは眠ってただけよ」

「よかった!!」

「でも、なんでWAXAなの？」

「それは、スバルたちが俺らに聞きたいこととかいっぱいあるでしょ?今日のことも説明しないといけないし……」

「だから、今日は疲れてるから明日ゆっくり話そうってわけ」

「なるほどね!今日はみんなかえりましょう!明日8時に駅の前集合よ!!」

「……了解!!」

こうしてみんなは帰る支度をしてそれぞれの家に帰った。

今はミソラ、スバルとヤス達だけだ。

「ヤス達って家どこなの？」

「ああー俺たち3人でスバルの家の前のあたらしい家にすんでんだよ」

「へーたいへんだね？」

「いや、けっこう楽しいよ？ なっ？ ひろき？」

「ああ、楽しいよ。俺は気まずいけどね！」

「なんできまずいの？」

「それはねーミソラちゃん……こいつらがいえでいちゃいちゃするからさあー」

「なにいつてんだよ！ いつもお前の前で俺がゆきなといちゃいちゃした？」

「俺の前ってことは俺がいないといちゃいちゃするの？」

「ヤスもそうゆう勘違いするようないかたしない。まだそんな関係じゃないでしょ！！」

そんなくだらないことを話していたらスバルの家についた。

「じゃあね」

「『また明日！！』」

そういつてヤス達とわかれ、スバルは自分の家に入っていった。

「ただいまー母さん」

「おかえりースバル！ ああ、そういえ……」

「ごめん、母さん後にしてくれる？ 部屋で少し寝たいんだ」

「良いけど部屋には……」

スバルはあかねの話を聞かずに部屋にいき、ベッドにダイブしてそのまま寝てしまった。

侵入者（前書き）

昨日は部活が1日だったので遅くなりました。

侵入者

スバルはよっぽど疲れていたのかベッドにダイブしてから1時間以上ねていた。だが、突入スバルの部屋がひかった

「やつほー」スバルく……………って寝てるし!!」

>ポロロン、しょうがないわよ、ミソラ。<

なんと、部屋がひかり現れたのは俺さつきわかれたミソラだった。どうやら電波変換してきたらしいが、なぜかスーツケースを持っている。

「それにしても宇宙の本ばかりだねー」

ミソラはキョロキョロとスバルの部屋を見回しながら、つぶやいた。

「あれ!?コレって……………」

>ポロロン、よかったわね?ミソラ<

「……………うん!!」

そこにはミソラがいままでに歌ってきたCDが保管されていた。

「スバルーおきなさい!あらここにいたの?ミソラ」

「はい!おじゃましてます。スバル君のお母さん!!」

ガバツツ

あかねはミソラを自分の方に寄せて抱きしめた。

「違うでしょ!?!ミソラは今日から私たちは家族なのよ?だからスバル君のお母さんじゃないし、ただいまでしょ!?!」

ミソラはその言葉を聞いて嬉しくて今にも泣きそうだった。

「ただいま、お母さん」

「おかえり、ミソラ……………今までよく頑張ったわね?これからは、私や大吾さんにいっぱい甘えなさい!」

「うん!!」

しばらく2人はそのままだった。

「ただいま!!」

「あら、大吾さんも帰ってきたしご飯にしましょ?ミソラ、スバル

を起こして。」

そういい残すとあかねは下に降りてった。

「スバル君!! ご飯できたよ? 起きて!!」

「……………」

ミソラは上を向いて寝ているスバルをゆすったが半のがない。

> そんなんで起きたら毎日まで俺はくろうしないぜ!! <

「スバル君起きて!!」

今度は、顔をつねったがそれでもスバルは起きない。

> ポロロン、スバル君ってこんなに起きないの? <

> ああ、これよりもひどいぜ <

「もう!! 起きて!!」

ミソラはスバルのおかなに飛び乗った。

ドスツ

「いった!! ってなんでミソラちゃんがいるの?」

「あれ! ? お母さんから聞いてない? 今日からスバル君の家に居候するんだよ?」

「ええー!! 初耳だよ?」

「よろしくね! ? スバル君」

ミソラはそう言いながらスバルにウィンクしてスバルからどいた。

(かわいいな…………… 僕やつぱり……………)

「どうしたの? スバル君? ご飯だよ?」

「いや、何でもないよ。行こ!!」

スバルとミソラはあかねと大吾がいる下に降りてった。

今はみんなでご飯を食べてながら話している。

「何で教えてくれなかったの、母さん?」

「その方が面白いじゃないの?」

「はあーロックはしってたの?」

> おふくろに言うなって言われてたからな! <

「いいじゃないかスバル。家族が増えて!!」

「そりゃそうだけど教えてくれたっていいじゃん」

スバルはそう言いながら味噌汁を飲んだ。

「いいじゃないの？ スバルも好きな人と一緒に暮らせてうれしいでしょ！？」

「ツツ！！ゴホオ、ゴホオ」

スバルはあかねの一言で口の中の味噌汁を思い切りのんでむせてしまった。スバルもミソラも顔が真っ赤だ。

「なに言ってるの？ ごちそうさま！」

スバルは逃げるように部屋にいった。

「あらあら、でもスバルは喜んでるわよ、ミソラ」

「え、本当！？」

「もちろん！！こんなにかわいい子とすめるんですもの」

「もう、お母さん！！ごちそうさま！」

ミソラも顔を真っ赤にしてスバルのあとを追った。

「今日にはぎやかだな？ あかね」

「そうね、大吾さん！？」

「スバルたちをあんまりいじめるなよ？」

「ほどほどにするわ」

そう言いながらも全然反省した様子がなくとても楽しそうなあかねだった。

侵入者（後書き）

今日は昨日のぶんを取り返します。

自分の思い

〈自分の思い〉

ミソラは今スバルの部屋のまえでたっている。さっき、あかねに言われたことが気になってしかたないのだ。

>ポロロン、いつまでそうしているの？<

「だって気まずいんだもん」

>ミソラの気持ちを言えばいいじゃない！？スバル君だって同じ気持ちよ？<

「そうかなあー」

>絶対そうよ？今日言うつて決めたんでしょ！？<

「そうだけど……。がんばるよハープ！！」

>応援してるわよ、ミソラ！！<

コンコン

「入っていい、スバル君？」

「いいよ」

ミソラはドアを開けて中に入った。

「私、スバル君にきいて欲しいことがあるの！！」

「な、なに？」

「なに？ミソラちゃん？」

>ロックー！私はじゃまだから外に行くわよ？<

ハープはハンターから出てきてロックを無理やり連れて行くとしたが……

>いいぜ、ハープ？<

ウォーロックからの答えは以外なものだった。

>あんたも空気読めるよ。うになったじゃないの？<

ハープはとても驚いていた。

>うるせえー<

そんな口喧嘩をしながら2体は消えていった。

「で、なにミソラちゃん？」

「あ、あのね？スバル君！私スバル君のことが……す、好きです！だ、だから私と付き合ってください。」

スバルはかなり驚いたのかしばらく沈黙が続いた。

「僕もミソラちゃんと初めて合った時から好きでした。僕でよければ喜んで！」

ガバツツ

「ちょ、ちよつとミソラちゃん」

ミソラはよほど嬉しかったのかスバルに抱きついた。

「いいじゃん！？付き合ってるんだし。嬉しいなーほんとに」

「僕も嬉しいよ？ミソラちゃんときあえて」

「ふられたらどうしようかと思ったよ……」

「ははは、そんな事しないよ？」

「……暖かいなースバル君。」

「そうだ！トランプしない？」

「良いけど……そろそろ放してよ？」

「っあ！ごめん、ごめん。」

スバルはたちあがり引き出しからトランプを出した。

「で、なにすんの？」

「うーんポーカ―は？」

「いいよ。ルールは？」

「負けたら、買った人の言うことを何でも聞くってのは？」

「そ、それはきついでしょ？」

「そうかなあー？じゃ5本勝負でパス1回OKは？」

「それでもきついでしょ？」

「気にしない気にしない！」

ミソラはスバルの反論を聞かずにトランプを配り始めた。

スバルのてふだ

？5？A？A？3？10

ミソラのてふだ

「5?6?9?10、JOKER

「僕は、三枚かえるよ」

「私は一枚」

スバルのてふだ

「A?A?5?6?4

ミソラのてふだ

「5?9?10?4 JOKER

「Aのワンペア」

「やった!!フラッシュ」

「まけたかあ」

「まず一つね!後でまとめてお願いするね」

ミソラまたトランプ配った。

スバルのてふだ

「2?5?8?3?7

ミソラのてふだ

「5?3?6?2?8

「僕は、4枚変えるよ」

「私 も4枚」

スバルのてふだ

「8?5?6?8?4

ミソラのてふだ

「8?K?Q?8?10

「「8のワンペア!!」」

「引き分けか……」

「つぎつぎ」

またミソラはトランプを配る。

スバルのてふだ

「5?5?6?2?2

ミソラのてふだ

「6?3?4?8?10

「僕は、一枚」

「私は四枚」

スバルのてふだ

? 5 ? 5 ? 5 ? 2 ? 2

ミソラのてふだ

? 1 0 ? 4 ? 5 ? 9 ? 3

「フルハウス!!」

「まけたかぁー」

ミソラはランプを配る

スバルのてふだ

? 5 ? 4 ? 2 ? 4 ? 1 0

ミソラのてふだ

? 5 ? 8 ? 1 0 ? 7 ? 9

スバルのてふだ

? 3 ? 4 ? 2 ? 4 ? 1 0

ミソラのてふだ

そのまま

「4のワンペア!!」

「フラッシュ!!」

「また?フラッシュ」

「ラッキー!!最後のバトルはお願いごと2つだからね?」

「……負けない。」

スバルのてふだ

? 1 0 ? 1 0 ? 1 0 ? A ? A

ミソラのてふだ

? 1 0 ? J ? Q ? K ? A

「「てふだは変えないよ!!」」

「勝負!!フルハウス」

「ロイヤルストレートフラッシュ!!」

「ええー!!!!本当だ。僕始めて見るよ。」

「私もだよ、自分でびつくりした。願い事はスバル君の勝った数ひいて5個か……」

「ひどいのはやめてね？」

「1つ目は……今度の日曜日にデートしょ？」

「う、うん。いいよ」

2人は顔が真っ赤だった。

「……………2つ目は、ま、毎日一緒にお風呂をに……………入る？」

ミソラは下を向きながら小さな声でいった。もちろん、スバルの答えは……

「パ、パス……！」

「ははは、冗談だよ。でもパスはもうだめね……！」

「……………ずるいよミソラちゃん……」

なんと、さっきのは演技だったのだ。

「3つ目は……今日からお互いに呼び捨てね……！」

「はあーわかったよ。ミソラ」

「4つ目は……今日から一緒に寝よ？」

ミソラがそういうとちようどあかねが布団を持ってスバルの部屋にきた。

「あら、じゃこれいらないわね？後お風呂入っちゃって」

「お、お母さん……！」

あかねは布団を持って行ってしまった。スバルは声をかけても返事をしない

「私、先に風呂入っちゃうね？5つ目は考えておくよ……」

「はあー大変だな僕って」

そんな事を良いながらスバルの顔は笑っていたのは誰も知らない。

>俺たちも戻っていいんじゃないか？ハープ<

>ええそうね<

>あん？どうかしたのかよ？<

>いや、あんた変わったなーと思って……………<

>そりゃ、地球に2年もいりゃ誰だって変わるだろ……………スバル達

には幸せになつてほしんだよ？<

最後の方はかすかにつぶやいたくらいの大きさでいった。

>フッフ、私はいまのあんた嫌いじゃないわよ？もう戻るわね？<

>ケツ！変わったのはおめーもだろうよ<

このあとスバルはミソラと交代で風呂に入り、明日も早いので寝ようとしているところだった。

「ほら早く！！スバル」

「やっぱ僕ソファで寝るよ……」

「う、う……やっぱスバルは私のこと嫌いなんだ……」

ミソラは得意の演技（泣きまね）でスバルを説得し用としていた。

「ち、違うよ！！ミソラ」

「……じゃあいいでしょ？」

今度は涙目＋上目使いでスバルをみた。

「う、わかったよ」

そう言いながらミソラが入っている布団に入っていた。

「やったー！！」

「あんま抱きつかないでよミソラ……」

「いいじゃん！？お休み」

チュッ

ミソラはスバルの口にキスをした。

「な、なにし、してんの」

「えへへ、私のファーストキスあげちゃった」

ミソラは恥ずかしそうに笑いながらスバルにいった。

「つつ……」

スバルは恥ずかしさのあまり気絶してしまった。

ミソラもその後、幸せそうに眠りについた。

自分の思い（後書き）

もしかしたらもう一話投稿するかもしれません。

電車の中で（前書き）

短いですが、多分次がながいので。

電車の中で

「スバルおきて!!」

「……………」

いまミソラはスバルを起こすのにくせんしていた。

>ポロロン、昨日よりすごいわね?<

>毎日これだぜ!?!<

「スバルおきてって……。起きないと……。こうだ!!」
チュツ

ミソラは寝ているスバルの口をキスしてふさぎ、鼻を手でつまんだ。
「……………ん、んーん、ぷはっ!!朝からなにすんの、ミソラちゃん?」

「何回呼んでも起きないスバルがいけないんだよー」

>ポロロン、早くしないとおくれるわよミソラ!?!<

「そっか……。今日はWAXAに行くんだっけ……。ミソラ先下に行つてて」

「わかった」

スバルは着替えてしたに降りていった。

「おはよう、母さん。父さんは?」

「スバル達がくる準備っていつてもう行ったわよ?早くしなさいね2人とも」

「「はい」」

2人は顔を洗ったりと準備をすませて待ち合わせ場所に行こうと玄関をでた。

「「行つてきまーす」」

「いつてらっしゃい」

待ち合わせ場所にはみんなもう来ていた。

「「おはよう、みんな」」

「……おはよう」「」

なんかみんな機嫌が悪い。特に委員長なんか黒いオーラかでてる。

「……。さ、行きましょう」

ちようど挨拶が終わって電車がきたので僕たちはのりこんだ。

このとき僕は重大なことを忘れていた。

「何でみんな座らないの？」

いま、席に座ってるのはスバルとスバルにべったりくっついてい
ミソラだけだった。

席が開いてないないわけでない。あいているのになぜかみんな僕
を囲んでいるのだ……

いや、ヤスとひろきは座っていて腹を抱えて笑っている。氷瀬さん
はそんな二人を止めながら笑っている。

「ど、どうしたの、みんな？」

「まだ、わかんないの？ 考えてみなさい。いつもと違うでしょ！！」
「いつもと違うって……。」

スバルは周りを見渡した。

「ヤスとひろきが僕達を見て笑っていてそれを氷瀬さんが怒りなが
ら笑ってて委員長といつも怒らないキザマロとゴン太が僕達を囲ん
でてその中には座っているWAXA僕と僕と腕を組んで笑っている
ミソラちゃんと大人しいロックとハーブがいて……ジャックとツカ
サくんは先に行ってるからって…ミソラなにやってんの!？」

「あ、バレた？」

「どうゆうことですか？ スバル君!!」

「そうだぞスバル!!」

「……。」

「ほら、放してよ。ミソラ」

「ええーいいじゃん、スバル。私たちフガツフガ」

スバルはミソラの口を急いでふさいだ。

「どうゆうことですか？ スバル君説明してください。」

「違うんだよ。これには理由があつて……。ミソラ手なめるの止めてよ!!」

「ぷはっ!! だってスバル放してくれないんだもん」
プチッ

「おい、説明し」

「黙りなさい。ゴン太、キザマロ!!」

「は、はい!!」

いままで黙っていた委員長が今までにないくらいの黒いオーラを出して話した。

「で2人はどういう関係なのかしら？」

顔は笑っているけど目が笑っていない委員長が脅すように聞いてきた。ゴン太とキザマロは後ろで震えている。そこにミソラが油を注いだ。

「同じ家に住むような関係だよ」

「何でお互い呼び捨てなのかしら？」

「それは」

「付き合ってるからだよ」

ビビってるスバルにたいし楽しんでいるミソラ。スバルは終わったと思ったが……

「そう……。スバル君、ちゃんと守ってあげなさいよ!!」

「え!？」

意外な答えにミソラとスバルは驚き、聞き返そうとすると電車が止まった。

「さ、ついたわよ。」

委員長が振り返った時に泣いているように見えたがそれにきずいたのは委員長のウィザードだけだった。

> いいんですか、ルナちゃん？ <

「いいのよモード。あたしよりミソラちゃんの方が彼を幸せにできるしね。それに……あの二人の間には誰も入れないのよ……」

> ルナちゃん……。 <

「ありがとねモード。あなたが私のウィザードでよかったわ」
> 私です。ルナちゃん<

勝てない理由（前書き）

遅れてすみません！

勝てない理由

スバル達は今、指令室に通じる廊下で待っていた。

「おはようみんな」

「おはよう、ジャック、ツカサくん」

「ジャック、ヤス達は？」

「あいつ等ならヨイリー博士と話してるからまだこないぜ！？」

「そうなんだ……」

「みんな久しぶりね、入っていいわよ。」

「久しぶりです。クインティアさん」

「入っていいわよ……みんな待たしてごめんなさいね。」

クインティアやジャックはディーラー壊滅した後、WAXAの職員として働くことを条件に解放されたのだ。二人とも喜んで引き受けた。

>ここにきたのも久しぶりだなスバル<

「そうだね、あれから平和だったから……。」

「ここが新しいくできた会議室つよ。個々にはいるのは初めてよね？」

「す、すげー」

その部屋にはたくさんモニターがあった。部屋の真ん中には楕円形の机がおりてあり、椅子が並べられていた。

「今、WAXAは拡張工事中だったからいそがしくてね。少し座って待ってくれる？もうみんなくるはずだから」

その後20分くらいモニターなどを見ていると見たことある人たちが入ってきた。

「今回のWAXAの襲撃事件並びにコダマ中学校の襲撃事件を起こした敵に対しての対策会議を始める！まず私は今回の作戦の指令長官の石川真守だ！よろしく。」

パチパチ

「それぞれの自己紹介といきたいがみんなここにいる者は知っているから今回協力してくれる者の紹介していく。まず、ヨイリー博士だ。」

「久しぶりねみんな、元気にしてたようね。」

「博士にはみんなのサポートをしてもらう。そのサポートを手伝ってくれる、助手のハートレスちゃんとアマケンからの応援で天地守くと宇田海深祐くんに協力してもらう」

「よろしく。」

「深祐ですよろしくお願いします。」

「ヨイリー博士の助手のハートレスです。」

「そして、宇宙のどこかにあると敵のアジトを探すのを担当したり、F M星とのかけはしになってもらう、星河大吾くんだ。」

「よろしく。」

「お、お父さん!!」

「俺も作戦に加わることになった。よろしくなスバル」

「次に、戦闘員の紹介だがクインティアくんと」

「この俺だ!!」

ウィーン

「「「え?」」」

「久しぶりだなスバル、ミソラ、ゴン太……」

「「「あ、暁さん!!」」」

「元気だったか!？」

「今までなにしてたんですか？」

「入院と修行だ!!」

「自信持っていえないでしょ!？」

「ははは、そういうなって……」

「あんなメールよこすから死んだと思ったじゃないですか？」

「ヨイリー博士やW A X Aの隊員、ジャックにクインティアが電波変換してバラバラになった俺を探してくれたんだよ。」

> おいおい、お前がいるってことはまさかアシッドのやろうもいるのか？<

> 当たり前ですよ、ウォーロック。寂しかったでしょう？<
> ツケ、やっぱいいやがったか<

「ゴオホン、話を戻すぞ！？そして水野くん、そして氷瀬くん。これでメンバーの紹介はおわりだ。次に昨日WAXAで起きたことについての説明をヨイリー博士から」

「昨日WAXAで起きたことを報告するわね。簡単に言うとWAXAは昨日敵の襲撃を受けたわ」

「襲撃ってみんな大丈夫何ですか？」

「さすがルナちゃんね！？いい質問よ。結果からいうとけが人も被害もなにもないわ。」

「なにもない？」

「それがメインコンピューターからデータがコピーされただけなのよ。」

「敵はなにもしなかったんですか？」

「そうよキザマロちゃん、敵は私達を眠らしてデータをコピーしただけ。コピーしたのがシリウスの情報と……スバルちゃんとミソラちゃんの情報なのよ」

「僕とミソラの！？」

「それで私たちのとこにきたのね」

なんかみんな笑った気がしたがあまりきにしないことにした。

「そうなの。私からの報告はもうないわ」

ヨイリー博士は席に座った。

「次はスバルくん、悪いが昨日の学校での出来事を話してくれ」

「わかりました。」

スバルは自分の席を立ててきのうのできことを話した。

「なるほど……君たちも大変だったようだな。では、水野くん雷道くん、氷瀬くん頼む。」

氷瀬さんが席を立てて説明を始めた。

「はい、まず今回の襲撃事件を起こしたグループですが……彼らの名前は”リメイク”という組織です。」

「その組織の目的は？」

「彼らは地球を作り直そうとしているようです。なぜかはわかりません。ですが、なぜシリウスやスバルくん、ミソラちゃんの情報を盗んだかはわかります。」

「なぜなんだい？」

「まず、シリウスの情報を盗んだ理由ですが彼が持っていたプログラムの行方がしりたかったのでしょうか。」

「シリウスが持っていたプログラム？」

「ええ、正確には組織から盗んだけど……このことはあとで詳しく話します。次にミソラちゃんとスバルくんの情報を盗んだ理由ですが自分たちの計画の邪魔になるか確かめるためだと思います。」

「なるほど……ではスバルくんの報告にあった攻撃が食らわないというのはなぜだい？」

「それは、彼らが”自然の力”をコントロールしているからだと思っています。」

「”自然の力”？」

「はい、この世界には火、水、雷、氷などのたくさんの”自然の力”があります。本来、人工に作られたもの以外にはもとも”自然の力”があります。ウィザードだって同じなんです。1人の人がたくさんの種類を持つていることもあります。」

それは電波変換にも影響があり、人とウィザードの”自然の力”がひとつでもそろっていれば電波変換できるのです。もし、”自然の力”を持たないウィザードと電波変換できたとしても電波変換した人からウィザードが”自然の力”を共有しようとして人体にとつもない影響がでてしまいます。」

「なるほど、それでシドウちゃんは長時間電波変換できないのね」

>それで何で奴らに攻撃できないんだ？<

「それは、”自然の力”をコントロールしてからだの外にオーラの

ように出していると”自然の力”を持っていない攻撃をすべてむこうができるからです。」

「なるほど、それで僕達の攻撃はきかなかったのか……………」

「ちよつと待ってくれよ、ロックマンとハープ・ノートはともかく俺のペインヘルフレ임なんかは火の自然の力じゃないのかよ?」

「それは、”火の自然の力”じゃなく、火の属性だからです。属性はその人が得意とする攻撃、”自然の力”はその人が持っている才能だと思ってください。」

「なるほどな……………」

そこでヤスが席を立てて説明をはじめた。

「そこで僕達三人とヨイリー博士たちに協力して作ってもらったのがエレメントプログラムだ。」

「エレメントプログラム?」

「このプログラムは電波変換した時などにその人が持っている”自然の力”を引き出してくれる。だけど簡単には使えない、練習が必要だ。」

「なにいつてんだ???」

まわりの人たちはうなずいているのにゴン太だけは、頭の上にはてながでていた。

「ゴン太君にはこのメットリオを使って説明するよ!!ゴン太電波変換してくれる?」

「わかった。いいかオックス?」

>プロロオ、いつでもいいぜ!!<

「トランスコード!!オックス・ファイア!!」

「で、ゴン太君はこのメットリオを敵だと思って本気で攻撃して、暁さんさんもよろしくお願いします」

「こんな奴余裕だぜ!!ファイアブレス!!」

ゴン太はメットリオに向かって火の息をふきかけた。メットリオは激しく燃える炎に包まれていった。メットリオは死んだとおもったが……。炎が消えるとそこには無傷のメットリオがいた

「これが、属性と”自然の力”との違い。このメットリオは少しだけだけど”自然の力”を持っているからゴン太君の攻撃はきかない。ゴン太だけじゃないみんなおなじだ。次、暁さんお願いします。」
「わかった。アシッドいくぞ！」
修行の成果を見せてやろう。」

>了解！！<

「トランスコード、アシッド・エース！！いくぜ、ロックオンソー
ド」

ザシュツツ

メットリオは二つに切れてくれよえてった。

「ありがとうございます。これでみんなわかりましたか？」

全員が納得の表情をしていた。

「最後にシリウスがリメイクから盗んだつと言っていたプログラムについてだけでもあれば、エレメントプログラムの進化版でブラックホールを操ることができるものです。あれはそう簡単に作れるものじゃないのでリメイクのメンバーはシリウスの情報を手に入れたと言うことです。そのプログラムは今、8個のデータになって色々なところにあるはず。奴らは必ずそれを狙ってくるでしょう。」

以上で報告を終わります」

ヤスとゆきなは席に座った。

「ありがとう、水野くん、氷瀬くんさてと……」

「長官、ちよつと良いですか？」

「なんだ、シドウくん？」

「僕達のグループの名前を決めましょう！！」
ドスツツ

「なにするんだよ、ティア！！」

「あなた本当に考え方がごともね」

「確かに、名前を決めるのもいいな」

「さすが長官！！」

「誰か意見のあるものは？」

「遊撃隊じゃだめなんですか？」

「そりやないだろスバル……新しいメンバーだって増えたんだからよ」

その場にいるみんなが考え込んでいると……

「スターナイト……星騎士団つてのわどうかな？」

「星騎士団……良いじゃないかミソラ！星騎士団で良いですよ、長官？」

「他に意見はあるか？……無いようなので星騎士団に決定する！」
パチパチパチパチ

「我々、星騎士団は目的はリメイクの探しているプログラムを彼らよりも先に探し、回収する。これが目的だ。だが、そのためには彼らとの戦闘が予想されてる。なんとかここにいる全員が”自然の力”を使えるようにしたいと思っている。そこで、この場にいる、”自然の力”をコントロールできる暁、クインティア、水野くん、雷道くん、そして氷瀬くんがスバルくんたちに教えるための修行を行う。今日は早めに休んで明日また集合しよう。」

「わかりました。」

「おのー僕達はどうぞれば……」

「キザマロちゃんとルナちゃん達には私達の研究の手伝いをお願いしたいんだけどいいかしら？」

「もちろん！！喜んでお引き受けしますわ、ヨイリー博士」

「なんとか明日までにはエレメントプログラムを全員ぶんのを用意できるようにするから今日ゆっくり休んでくれ。」

「最後にここにいる星騎士団全員がブラザーバンドを結ばうとおもっただがどうだ？」

「良いですね、長官！！」

この意見に全員が賛成し、あちこちでブラザーバンドを結ぶ音が響いた。

「では、これで今日の対策会議を終了する。解散！！」

今後の予定やグループの名前を決めたりとなんだかんでもう2時

間はたっていたためみんな無言で帰って行った。

勝てない理由（後書き）

明日部活の試合でもしかしたら投稿できないかもしれません。

幸せな時間

スバルとミソラは、初めて大人と一緒に本格的な会議をして疲れたのでまっすぐ家まで帰ってきた。

「「ただいま」」

「おかえりスバル、ミソラ。お疲れ様」

「本当に疲れたよ」

スバルはリビングのソファーにすわりため息をつきながら答えた。

「そうだ！悪いんだけど2人で留守番しててくれる？」

「別にいいよね、ミソラ！？」

「もちろん！！」

「ありがとう、助かるわ。急に出かけないと行けなくなっちゃって

……」

「パート？」

あかねは大吾が行方不明になったときに家庭をまもるためにパートを始めた。大吾が帰ってきた今やる必要はないが本人が楽しいといつてまだ続けている。

「そうなの…人数が少なくて困ってるって言うから。じゃ頼むね！？」

「「行つてらっしゃい。」」

「さて、これからどうするミソラ？」

「何かして遊ぼう！？」

グウーウ

「……お腹へっちゃった、エヘヘ。」

ミソラは顔を少し赤くして舌を出して恥ずかしそうに笑った。

（かわいいな、ミソラ）

「じ、じゃご飯食べよっか？」

「あ、そうだ！」

「どうしたのミソラ！？」

「私にご飯作るよ！スバルはテレビでも見て待ってて」

「え、いいの？」

「うん、スバルに私の手料理食べてほしいし……」

「え、でも……」

>スバル、ここは俺と一緒に刑事ドラマでもみようぜ？<

「うーん、じゃお願いねミソラ！？」

「楽しみにしてて……」

>ポロロン、あのロックが空気を読めるなんて……<

「ロックくん、だって変わったんだよ？きつと」

>そうね……！……何か手伝うことある？<

「じゃあこれの作り方調べてくれる？」

>まかせといて……！<

その後、キッチンからは食材をきざんだりする音がリズムよく聞こえてきた。

「できたよースバル……」

ミソラに呼ばれてテーブルを見るとスバルの好きなハンバーグとサラダ、ご飯がよーいしてあった。

「うん、ってハンバーグじゃん

……」

「そうだよ。スバルが好きって言ってたから……冷めないうちに早く食べよ！」

「いただきます！」

「どうぞ」

パクッ……！モグモグ

「どう、おいし？」

「うん、すごくおいしいよミソラ……」

そういつてスバルはものすごいいきおいで食べていったが……

「スバル……」

「なに、ミソラ……？」

ミソラに呼ばれたので顔をあげると、ハンバーグを一口くらいに切ったのをミソラのはしでつかんでスバルの前に持ってきている。

「はい、あーん」

「いいよ、ミソラ恥ずかしいから……」

「いいじゃん、私とスバルだけなんだから……はい、あーん」

「わかったよ……あーん」
パクッ

「おいしい？」

「……うん」

ミソラは笑顔でスバルの方を見つめてるがスバルは恥ずかしくて顔をあげれない。

（かわいいな、スバル。顔真っ赤だよ……そうだ！）

「関節キスだね！？」

「つつ！ぼ、僕先にうえいつてるね？」

スバルは恥ずかしくて2階に逃げていった。

「あら、やりすぎたか……」

>ポロロン、幸せそうね、ミソラ！？<

「わかる？」

>顔にでてるわよ、顔に<

「ハープお願いがあるんだけどいい？」

>何かしら？<

「ロックくんを連れ出してほしいんだけどいい？」

>いいわよ！！<

「やった！！ありがとうハープ」

>いいわよミソラ。早速行ってくるわね？<

「お願いしますー！」

ハンターからハープが消えて少したつと2階から悲鳴が聞こえてきたがきにしない。

「さて、かたずけも終わったしスバルと遊ぼ」

ミソラわスキップしながらスバルの部屋に行った。

「スバル、入るよー」

「どうぞー!!」

「あのさぁースバル!？」

「な、なにミソラ？」

（何でこんな笑顔なんだ？絶対なんかたくらんでるよ……。）

「今度の日曜日のお願いがかえてもいい？」

「いいけど……仕事でも入っちゃったの？」

「ううん、違うよそれに歌手活動は中学のあいだお休みすることになってるんだ。」

「じゃあなんで？」

「ほら、明日からWAXAで修行だからいけないじゃん!？」

「なるほどね。別に僕はミソラが行きたいってっていたら断んないよ?」

「そう?ありがとう」

「で、なににすんの?後2つ残ってるけど……」

（なんかきくのこわいなぁー）

「今日1日私のいうこと聞いて!!」

「…………拒否権は?」

「なし!!」

「はぁーわかったよ。」

「やったー」

ミソラは部屋中を飛び回っていた。よっぽどうれしかったのだろう。

「まずねー私のこと抱きして!!」

「いきなり?」

「やっぱり…………スバル私のこと嫌いなんだ。」

ミソラの必殺、涙目＋上遣いもちろん演技だとスバルも少しきずいているが……

「こっ、ミソラ?」

「うん、ありがとっしばらくこのままでお願い」

しばらくの間2人はずっとお互いのぬくもりを感じていた。

「ありがとう。スバル!!」

「どういたしまして。」

スバルは緊張して疲れたのかベッドに大の字になって倒れた。その上にミソラがいきおいよく座ってきた。

ドスツ

「寝ないでよスバル!!」

「ミソラ、重いよ……」

ドスツ

「女の子に重いはないでしょ?」

「ごめん、ごめん。」

「まったくもー」

ミソラはほつぺたを膨らまして怒っている。

(かわいいなー怒ってるように見えないよ)

「そろそろどいてよ、ミソラ……」

スバルの上に座ってもう1時間はたった。

「嫌だ」

「何でもするからさあー」

「じゃあ、この状態のままキスして!!」

「それはちよつと……」

「じゃあこのままね」

「……わかったよ」

スバルは自分の上に座っているミソラを自分の方に抱き寄せててキスをした。

2つの影が重なって数分後、

「……もういいでしょ?」

「……うんありがとう」

「下に行ってなんか飲もうよ」

「いいよ」

2人はしたに降りて行った。

「スバルはソファ―に座ってて。そっち持つてくから」

「うん、ありがとう」

ミソラは冷蔵庫からオレンジジュースを取り、コップに入れて持つてった。

「お待たせ、スバル！―って寝てるし……………」

スバルはソファ―の背もたれに頭を置いて寝ていた。

「そうだ！」

ミソラはあいているスバルの隣に座ってスバルの頭を自分の方に向けたおして膝の上に頭を置いた。

今はスバルを膝枕している。

スバルは疲れていたのかまったく起きない。

「かわいいな―スバル。」

ミソラはしばらくスバルの寝顔見つめて、寝てしまった。

一時間後

スバルは起きようと伸びをしようと手を天井に向かって斜めに伸ばした。

ムニユツツ

「え？なんかあたたつた……………え！？な、なんで僕ミ、ミソラに……………つてことはさっきのはミソラのむ、む……………」

スバルは驚きのあまりきせつしてしまった。

その後あかねが大哥と一緒に帰ってきて、夕飯の時に散々からかわれたのはいうまでもないことだった。

幸せな時間（後書き）

感想、意見などよろしくお願いします。

約束

スバルとミソラは今、部屋にいる。夕飯の時にあかねと大吾にさんざんからかわれたのだ。だから、食事を急いですませて逃げるように部屋にきた。

「はぁーお母さんたちには困ったよ……」

「アハハ、ごめんねスバル!？」

「ミソラが謝ることじゃないよ……。僕は展望台に行ってくるけどミソラも行く?」

「もちろん!!」

「うん、じゃ行こっか。」

外はまだ寒いのでスバルとミソラは寒くないように準備をしてから出かけることにした。

「お母さん、展望台に行ってくるね?」

「いいけど遅くならないようにね?」

「はい」

「フッフ、仲良いわね。将来が楽しみだわ」

あかねは2人に聞こえないように言った。

しばらく歩いていると展望台についた。

「スバル、あそこに座ってみよ?」

「いいよ。今日もほしが綺麗だなあー」

スバルが言うとおり今日は星がきれいにみえている。

「毎日ここにくるの?」

「いや、最近は来てなかったけどいつもは2日に一回はきてるよ」

「そうなんだ……でも本当にきれい……」

「……ミソラちゃんと同じくらいにね」

スバルはミソラに聞こえないようにかすかな声でいったが

「なんか言ったスバル!？」

「な、なにも言っていないよ」

ミソラが耳がすごくいいのを忘れてた。

しばらく沈黙が続く

「覚えてる、スバル?……私とスバルが初めてあった日のこと」

「もちろん!……ここで出会ったんだよね?」

「うん!……そして、ここでお互い初めてのブラザーになった……」。

あのときは本当に嬉しかった。1人じゃないと思えるようになった。

「

「僕も同じさ、本当に嬉しかった。」

「でも……あれからスバルに助けてもらってばかりだね。」

「なにいつてんの?ミソラのその笑顔で僕は何回助けられたか。」

「ありがとう、スバル……」

「これからもミソラは笑顔でいてね?」

「スバルがいればいつも笑顔でいるよ。」

ミソラはスバルの腕に抱きついた。

「ミソラ、そろそろ帰ろうか?」

「このままかえろ!」

「それはちよつと……誰かに見られたら大変だし……」

「いいじゃん。私はへいきだよ?」

「はあーわかったよ……かえろ!」

スバルはミソラを説得するのをあきらめ、その状態で家まで帰った。

「「ただいま」」

「おかえり、お風呂入っちゃって2人とも……」

「ミソラ先入っていいよ」

「やだ!」

「……え、なんで?僕先入るよ?」

「ダメ」

「じゃあどうするの?」

「……一緒に……入ろ?」

言っている本人も恥ずかしらしく、少し顔が赤い。

「ミ、ミソラ！なに、なにいつてんの？」

「嘘だよ……私先入っていい？」

「よかったー……いいよ先はいつて」

そういつてミソラは準備をしてお風呂に行った。

「ハハハ、スバルも大変だな」

「笑いごとじゃないよ……」

「そうだ！スバル良いもの見してあげる」

あかねがはかたずけを終わらして自分のハンターをスバルに見せてきた。

「え？なになに……って、お母さんいつ撮ったのこの写真！？」

「よくとれてるでしょ？後で印刷して飾っちゃおうかなー」

そこに写っていたのは寝ているスバルをミソラが膝枕している写真だった。

「消してよ、お母さん！！」

「後で印刷したら消すわよ……」

「なにをけすって？」

「ミソラ、もうでたの？」

「あら、丁度よかった。ミソラこれ見てよ」

「ちよっとお母さん！！」

「あ、この写真私にもください。」

「ミソラまで……僕風呂入ってくるよ……」

スバルはもう説得しても無駄だとおもい風呂に行ってしまった。

「あ、そうそう。今日ミソラのマネージャーの金田さんって人がきてこれを渡してくれて……」

「マネージャーが、何だろう？」

あかねから渡された封筒には手紙が入っていた。

『響ミソラへ』

ミソラ元気にやってるか？中学生生活初日から大変だった

みただけで大丈夫ですか？僕からこんな手紙を送ってもいまさらと思われるかもしれないけれど、僕が今までミソラに仕事のことばかり言っていたのは理由があります。芸能界というのはとても厳しい世界で人気がなくなってしまうえば仕事ができなくてもなにもできなくなってしまう。最後には芸能界から去ってしまうことになります。僕はマネージャーとしてそんな人を何人も見てきました。だから、ミソラにはそうはなつてほしくなかった。でも、そのせいでミソラにたくさんの負担をかけてしまったのも事実です。そのせいで、小学校にはあまりいけずに友達と呼べる人も少なくなってしまったかもしれない。だからミソラに中学生生活をおくる3年間、芸能活動休止をしてもらいました。この3年間は勉強もしてほしいけれど、たくさん思い出を作ってくれたらうれしいです。そのためにやくにたつようにゴールデンウィークにいくナンゴク島の宿泊券を同封しておきます。スバルくん達といってください。

後、星河さんとスバルくん達にあまり迷惑をかけないようにしてください。最後にミソラの学校生活がとても楽しく、充実したものであるようにと心から思っています。

マネージャー　金田より』

「金田さん……………」

ミソラはこの手紙を読んでマネージャーに感謝していた。

>ポロロン、よかったわね？ミソラ。こんなに思ってくれる人がマネージャーで……………」

「うん！！」

ミソラは手紙を自分の荷物の中に大切にしまった。

「って、いつ帰ってきたのハープ？」

>ミソラが部屋に入って手紙を読んでいるときよく

「全然気づかなかったよ」

そんな話をしているとスバルが部屋に入ってきた。

「明日朝早いからもう寝ようか？」

「そうだね!!」

2人は同じ布団にはいつて寝ようとしたが……

「あんまりくっつかないでよミソラ」

「……。」

「ミソラ？」

「……また、戦いが始まるんだよね？」

「そうなるだろうね……」

「私やだよ……またみんなが傷つくなんて……。この前は

水野くんたちが助けてくれたけど……もし助けてくれなかったらみんな、みんな……。私一人になるのやだよ、スバルが傷つくのも」

ミソラはスバルの背中に抱きつきながら泣いていた。

「大丈夫だよミソラ」

スバルはミソラの方を向いてミソラを抱きしめた。

「僕は大切な仲間を守るために戦う。だから、けがをしないなんて約束はできないと思う。でも、僕はミソラをひとりにしないし、だらも死なせたりしない。だから、だからもうなかないでミソラ……僕は笑ってるミソラが一番好きなんだ。」

「ありがとう、スバル。約束してくれる？」

「絶対ミソラをひとりにしない。約束するよ!!」

「ありがとう。……今日最後のお願いしていい？」

「なに？」

「今日、このまま寝てほしいのとキスして？」

「拒否権は？」

「もちろん、なし」

チュッ

スバルはミソラに自分からキスした。

「おやすみ、ミソラ」

「おやすみ」

2人は深いいねむりについた。

約束（後書き）

ミソラのマネージャーを良い人に見えました。
感想、意見待っています。

修行開始（前書き）

遅れたのに短いです。

修行開始

「スバル、おきて」

ミソラはいつもどおり、起きないスバルを今日はどうやって起こそうか考えていたら

「うーん、おはようミソラ」

なんとスバルがすぐに起きてしまった。

>めずらしいこともあるもんだぜ、あのスバルが一回で起きるなんて<

「ひどいなロツク、僕だって起きれる時は起きれるよ!!」

「……つまんないの」

ミソラはスバルが起きてしまったためにイタズラができず、がつかりしていた。

「ミソラ今なんか言った!？」

「なんでもないよ。それより、早くご飯食べよ?」

「わかった。先に行つて」

ミソラはもう着替え終わっていたので先にしたに行つた。スバルもすぐに着替えて降りて行つた。

スバルとミソラはご飯を食べ、修行をする4日間はWAXAに泊まるので、荷物などの準備などをすまして、靴をはいている時にあかねがきた

「今日からWAXAに泊まるのよね?頑張りなさいよ!!」

「うん、ごめんね心配かけて……」

「なにいつてんのよ!この4日間で私が心配しなくてもいいくらいになつてきなさい。」

「がんばるよ。」

「ミソラも頑張りなさい!？」

「わかつてるよお母さん!!」

「ロツクくんはハープちゃん、2人をよろしくね?」

> まかしとけおふくろ!! <

> 安心してくださいあかねさん。 <

「いつてらっしゃい!」

「いつてきます!」

2人は挨拶をすましてWAXAに向かった。

今日は、委員長とキザマロは遅れてくるので現地集合なのだ。2人は食材などを買いに行くらしい。

いつもと違い電波変換して行けるのでとても早い。

WAXAにつくとゴン太以外みんなそろっていた。

「おはようみんな」

「おはよう!!」

「あれ、ゴン太は?」

「ゴン太の奴まだ来てねーんだよ」

そんな話をしているとゴン太が電波変換したオックス・ファイアがウェーブロードを走ってきた。

「わりー、おくれたぜ」

「なにしてたんだよゴン太!」

> プロオ、ゴン太は朝から牛丼を食べてたらくれたんだく

「ゴン太くん朝から牛丼食べたの?」

「お、おう!! 今日から修行だと思って気合い入れようとして……

……」

「ハハハ、ゴン太らしいや」

その場にいるたれもがそう思っていた。

しばらくすると暁とクインティア、ヨイリー博士が歩いてきた

「よう、もうそろってるな!」

「はい!!」

「じゃ、WAXAの新しくできた新館に行くか!? あそこはひろいぞーなんだって旧館の3倍近くあるからな!」

「そんなにでかいんですか?」

「ああ、新館は地下に3階、地上に3階の建物だからな！」

「すげー、さすがWAXAぜー！」

「だろ！？迷子にならないようになー！」

>よくそんなこといえますね？シドウ。あなたもいい加減覚えてくださいよ！！<

「そういつなつて、アシッドー！施設の説明だか……… ティア頼む」

「はあー、まず、地下3階はWAXAの情報、セキュリティを管理する部屋よ。ここには一部の人間しかはいれないわ。地下2階はシュミレーションルーム。今回修行に使う部屋でいくつもの部屋に分けたりできるわ。地下1階が研究室、1階がロビーと研究室それに食堂。2階が作戦司令室と会議室。で、一番上が研究員や隊員たちが泊まったりする場所よ。私達が使うのは地下2階と6階の宿泊階ね。移動には3つあるエレベーターを使うわ」

「食堂もあるのか！？」

「ええ、それに地下1の研究室には世界中に3個しかない高性能天体望遠鏡があるわ。」

「本当ですか？」

「そうよスバルちゃん、よかつたら今度見に来なさいよ。」

「本当ですかヨイリー博士？」

「もちろんよー！」

スバル達が地下に行くためにエレベーターに乗るとミソラが疑問に思っていたことを聞いた。

「あのー暁さん、そんなこと私達に話していいんですか」

「お前達がだれにも言わなければ平気だよ。もし誰に言ったりしたら……サクサクサク」

シドウはうまい棒を食べながら真剣な顔になった

「言ったら！？」

「俺が長官に怒られるー！」

「ハハハ……」

そんな話をしているうちに地下2階のシュミレーションルームに

ついた。

「さて、これからの説明をするか。初めに修行は1対1で行う。まず、やすとスバル、ゆきなとミソラ、ひろきとつかさ、ティアとジャック、俺とゴン太のチームだ！！この後、部屋を5つに分けるかれそれぞれ開始してくれ！！」

「それとこれが昨日言っていた、エレメントプログラムよ」

スバル達は博士からプログラムを受け取ってハンターにセットした。

「では、それぞれがんばるように」

「「「「はい！！」「」「」「」

修行開始（後書き）

もしかしたら明日、投稿できないかもしれません。でも、なるべく頑張ります！

覚悟

「覚悟」

「スバル、やす」

「よろしくね！？やす」

「ああ、さっそく修行をはじめると、いききたいところだけど確認したいことがあるんだ！」

「なに！？」

「スバル、いきなりだけど覚悟はある？」

「覚悟！？」

「そう、覚悟。これから戦う相手はスバルが今まで戦った奴らよりも強いと思う。それでも戦う覚悟はある？」

「……僕の覚悟……」

>スバル、俺はお前についてくぜ！！お前がどんな判断をしようとな！<

「どうする？」

「僕は戦うよ……仲間を……守りたい。それにミソラを守りたい。」

「それがスバルの覚悟かい！？そのせいで死ぬかもしれないよ？」

「僕は絶対に死なないし、誰も死なせない。そのために僕は強くなるんだ！！」

>それでこそ俺の相棒だぜ！！

よろしくなスバル<

「こちらこそよろしくね！？ロツク」

その時、ハンターがひかりだした

『エレメントプログラム起動。自然の力”風”を確認』

>なんだこれ？<

「エレメントプログラムがスバルの覚悟を認めたんだよ。スバルは風か」

「それでやすはあんなことを聞いたんだ。」

「さて、修行をはじめるか!？」

「うん、よろしく!!」

「力のコントロールは難しいけどあきらめるなよ!!」

>俺とスバルがあきらめるはずないだろ?<

「ハハハ、期待してるよ」

「ミソラ、ゆきな」

「よろしくゆきな!!」

「こちらこそよろしくねミソラ!!」

はじめる前にミソラに聞きたいことがあるんだけど……いい?」

「もちろん!」

「これから戦う相手は今のミソラたちより確実に強い。それでもミソラは戦う覚悟がある?」

「私の覚悟……」

「よく考えていいよ?これが修行の第一段階だから」

「私の戦う理由……」

>ポロロン、そんなに考えなくてもわかってるでしょ?

私はどんな理由でもミソラと一緒によ!!<

「ありがとうハープ」

「教えてもらえる!？」

「今までの戦いは自分に力がなくてスバルが一人で戦って、私はそれを遠くで応援するしかできない。もう、そんなのいや!!私もスバルと一緒に戦いたい。そのために私は強くなる。」

ミソラが言い終わるとミソラのハンターがひかりだした。

『エレメントプログラム起動。自然の力”音”を確認』

「ミソラは”音”ねえー。ミソラにピッタリだね!？」

「自然の力に”音”なんてあるの!？」

「うん、他にもたくさんあるんだよ。さて、これから自然の力のコントロールの修行をはじめよう!準備はいい!？」

「もちろん!!」

ミソラたちも修行が始まった。

「ツカサ、ひろき」

「よろしくひろきくん!!」

「よろしく。それとお互いブラザー何だから呼びすてにしない?
んってなんかやなんだよね」

「そうだね、そうしよう」

(ヒカル)>オイオイ、さっさと修行を始めろ!?!<

「……………わかったよ」

>わかりやいいんだよわか…………<

「ツカサ、俺お前たち教えるのやめるわ!」

>はあ?なにいつてんだよ<

「ごめんひろき、ヒカルのコントロールことは僕が謝るよ!!」

「いや、ツカサはわるくない。ヒカルっていったっけ?だいたいそれが人にもの頼むたいどかよ?」

>……………言わせておけばてめえ調子のりやがつて<

「はつきり言うが、俺はエレキよりも強いからおめーじゃたおせねーよ!?!」

「やめてよ2人とも!!」

「悪いな、ツカサ!!修行は中止だ。こいつが謝るまでなにも教えない」

「ヒカル謝って!!」

>何で俺がこんな奴に頭下げんだよ!?!<

「僕たちは修行しないといけない。それなのにひろきが降りたら…」

…」

>わかったよ。ひろき俺が悪かった。だから、俺たちを教えてください。ツカサには悪いことをたくさんしてきた。だから、みんなに恩返ししたいんだ。だから、お願いします<

ヒカルは電波変換したブラックのまま頭を下げた

『エレメントプログラム起動。自然の力”雷”を確認』

「もう、顔を上げてくれよヒカル。俺は君の覚悟をみたかったからこんなことしちゃったごめん。」

>じゃおしえてくれんのか？<

「もちろん、こんな俺でいいならな！！」

「>よろしくひろき。<」

「ゴン太、暁」

「よし！！さつそ始めたいがまずゴン太はなぜ戦う？」

「何でそんなこときくんのだ？」

「いいから、答える！！」

「俺、前にもいったけど委員長とキザマロを守りたい。俺はそのために戦う。」

「本当にそれがゴン太の覚悟か！？」

「難しいからよくわかんないけど多分そう」

『エレメントプログラム起動。自然の力”火”を確認』

「ハハハ、ゴン太らしい答えだな。よし、今日から俺とゴン太は師匠と弟子だ！！ビシバシ鍛えるから覚悟しろ」

「よろしくな暁さん」

「ジャック・クインティア」

「よろしくな姉ちゃん」

「ジャック…あなたこの戦いの覚悟はある？」

「なにいつてんだよ？」

「いいから答えて！！」

「……俺ら2人とも前回、スバルに迷惑をかけちゃった……でもあいつは俺のことを友達って言ってくれた……。俺はあいつに恩返ししたいんだ」

ジャックのハンターが突然ひかりだした。

『エレメントプログラム起動。自然の力”炎”を確認』

「私と同じねジャック……」

さて、修行をはじめるわよ！？」

「頼むぜ姉ちゃん！！」

こうしてスバルたちの自然の力をコントロールする修行が始まった。

覚悟（後書き）

遅れたのに短いです。
すいません

コントロール（前書き）

遅れてごめんなさい

文が今までよりもひどいし、短いです

コントロール

「コントロール」

「みんな聞こえてる？ エLEMENTプログラムが起動したようね！？
最初の段階はみんな一緒にやるわよ」

ヨイリー博士の言葉とともに、部屋を分けていた壁が消えた。

「ここからは、ヤスとひろきとゆきなに頼む」

「「「わかりました！」「」「」

「さ、始めるか……」。

“自然の力”のコントロールには、発動、圧縮、解放、加工の4種類ある。これをそれぞれできるようにしてもらう。まずは基本の発動を取得してもらおうと思ってる」

「こつとかねえーのかよ？」

「ゆきな教えてやってくれ」

「はい。えーとそれぞれの眠っている力をイメージしててに出す感じだよ。やってみて」

みんなゆきなの説明

「……ぜんぜんわかんねー」

「いや、だまされたと思っていわれたとおりやってみ？」

「ヤスが作ったELEMENTプログラムは“自然の力”をコントロールできるようにしてくれる。とりあえずやってみ？」

スバルが手を前に出して集中し始めた。

（風を手に出す感じ……）

フワッ

「フワッ？」「」

スバルの手に風の渦が集まっていた。

（まさかいきなりできるとはな……）

「す、すごい！！」

「な、なんかできたけど消えないよ！？」

「ははは、消えろと思えば消えるよ!!」

>さすが俺の相棒だぜ!スバル!!<

「よし、オレも負けられねーぜ!!」

>ポロロン、そうよミソラ!! 私たちも負けてられないわ<

「頑張ろうハープ!!」

「そうあわてるなって、暁さんたちも一時間はかかったからなスバルはとくべつなんだよ。」

「そうよ!?!今日の昼までにできれば平気よ!」

「あのー僕はなにすれば?」

「そうだなー、手のひらに風を長時間だしたままにいる練習をしてくれ」

「わかった!」

この後全員が手のひらに自然の力を出すことができるようになった。

「さて、休憩がてら飯でもくうか?」

「」」「」」「賛成!」」「」」「」」

そして、みんな電波変換を解除して、食堂に向かった。

「俺もっ、腹減って死にそう。」

「お疲れ!!ゴン太」

「い、委員長!キザマロ!」

「ゴン太くんが頑張ったって聴いたからばくと委員長で牛丼作ったんですよ!!」

「これ食べてまたがんばりなさいよ!!私ほこんなことしかできないんだから」

「そんなことないぜ!!俺頑張って2人を守るから、そんなくらい強くなるから応援してくれよな!!」

ゴン太はそっくり、牛丼を食べ終わるとまた練習をしにいった。

コントロール（後書き）

先週はとても忙しく、小説を書く暇がありませんでした。今日からは遅くても3日に一話は投稿できるように頑張ろうと思っています

コントロール？（前書き）

なんとか投稿

感想待ってます

コントロール？

「コントロール？」

「さて、飯も食ったし、修行再開しますか！？」

ヤスが席から立ちみんなに聞くとそこにいた全員が拳を上にあげた。

「……おー……」

「次のステップは“発動の維持”だ！！これは今日ののこりを使つてできるようにしてもらおう。」

「“発動の維持”！？」

ゴン太以外は理解したようだがゴン太は全くわかっていなかった。

「わかりやすく言うと、さっき自然の力を手に出したでしょ？それを手のひらの上に出したままにするの！！」

「最低でも20分は出しっぱなしにできるようになつてもらうぜ！？」

「あの一聞いてもいい？」

「どうしたのミソラちゃん？」

「これって集中しないと手のひらにでてこないけど戦闘で使えるの？」

「まずこの修行は力を長時間だすこと。すぐに力をだす。と考えてくれればいい」

長時間だせればだせるほど早くだせるからね。わかった？」

「うん、ありがとう」

「さ、早速始めて……」

その声と同時にみんな手を前に出して集中していた。

スバルの手のひらには風の渦ができ、ミソラの手のひらには空間ゆがんでみえていて、ゴン太はオレンジ色の優しい感じの火が燃え、ジャックはゴン太のとはちがい赤く勢いよく燃えている炎がでてツカサ達は電気が丸く集まって音を立てているのがでていた。

8分後

全員の手のひらからだんだんと力が消えていった。

「はぁ、はぁ、はぁ」

みんな動かずその場で集中していたただけなのに疲れていた。

「どうだ？意外と難しいだろ」

「うん……。少しでも気が散るとすぐに消えちゃうんだもん。」

「……みてみるよ!？」

ひろきが指で指した方を見るとなんとミソラの手からはまだ空間がゆがんでみえていた

「す、すげー」

「なんで響はいきなりできんだよ」

「すごいなー」

「俺も驚いたぜ!？いきなりこんな長時間できる奴をみたのはゆきないらいだな」

「氷瀬さんもできるの？」

「俺ら3人のなかで一番長くできるのがゆきななんだよ」

「俺たちも最初は出来なかったしな!？」

「そうそう、こればかりは才能だよな？」

（本当にすごいのは、初めてやるのに周りが騒いでも出来るあの集中力だけだな）

「ふうー、もう無理!！」

「いきなり合格だな。ミソラちゃん」

「なんか嬉しいなー」

>ポロン、さすがミソラねく

「僕も負けてられないな!！」

「こればかりは練習あるのみだからなー頑張れ!！」
ピピピッ

「わりー、ちょっと外行つてきていいヤス？」

「どうしたひろき？」

「電話がきたからちよつと行ってくる」

ひろきは電波変換を解除して外に行った。
「俺らは修行を続けるぜ!!」
またみんな集中し手のひらに力を集めた。

くひろきく

WAXAのトイレにひろきたちはいた。他には誰もいない。
「ライアン誰からだ?」

>あいつからだよ!!今つなげる<
ハンターの画面には黒いフードをかぶった人が写っていた
声からして女の子だろう

『……そっちはどんな感じ?』
「WAXAで順調に進んでる。やっぱりスバルたちはいいい才能を持つてる。……そっちは?」

『今のところは大丈夫。GWまでは準備するわね。だからGWが始まったら行動をおこす。』

「わかった。しばらく連絡できないな………」

『ゆきなとヤスは?』

「俺がなんとかするよ。」

『お互い頑張りましょう』

「ああ」

ブツン

「さて早く戻らないと怪しまれるな。」

ひろきはトイレから出て行った

「わりー、わりーってなんでみんな電波変換を解除してんの?」

「もう限界だそうだ。電波変換といてみんな寝ちまった」

「今日はもういいじゃない」

「ああよく頑張ったよ」

こうして修行1日目は終わった。

コントロール？（後書き）

ひろきが怪しくなってきた（笑

二日目の始まり（前書き）

遅れてすみません

あとがきで理由をかきます

二日目の始まり

全員が疲れて寝てしまった後、彼らはWAXAの隊員達によって上の階にある個室の宿泊施設にそれぞれ運ばれていった。

「う、うーん……ここはどこだ？」

やっと起きたか……。ここはWAXAの宿泊施設だ。お前達は自然の力を長時間だす修行の途中で気を失ったところを暁達に運ばれたんだよ

「そうだったのか……。ロック今何時？」

今、8時ちょうどだ

「ありがと。もうそろそろ起きるか……。あれ!？」

スバルはベットから体を起こそうとしたが体が上がらない。

スバルは布団がもりあがふくらんでいるところを見て驚いた。

「ミ、ミソラなんでここに」

なんとスバルの布団中にはミソラが寝ていた。

ポロロン、おはよう、スバルくん

「ハ、ハープ！な、なんでミソラがここに寝てるの？」

それがね……

「時間がもどること4時間前」

「う、うーんここは……」

ポロロン、ここはWAXAの宿泊施設よ。あなた達は修行の最中に疲れてきせつしてはしまったのよ

「そういえばそうだった。スバルは？」

隣の部屋で寝てるわよ。あいかわらずラブラブねー。ってどこ行くの？

ミソラはさっきまで自分が寝てベットからおらて部屋からでようとしている。

「どこってスバルの部屋」

スバルくんの部屋ってねー、スバルくんだって疲れて寝てるわよわよ

「大丈夫、大丈夫！ただ一緒に寝るだけだから」

そう言ってミソラは部屋を出ていってしまい今になる。

なんとか止めようとしたんだけど無理だったのよ。ごめんなさいね

「はぁー…、何となく想像できるよ。ほら、ミソラ起きて」

スバルは何とかミソラを自分の横にずらし体を揺らして起こそうとしたが全く起きる気配がない。

「ほら、起きてミソラ朝だよ！」

さつきより強く揺らしたがまだおきない

「おーい、起きて下さいよミソラさーん」

つつん

スバルはミソラの頬を指でつついた。

「う、うーん」

スバルがつついたのがくすぐったかったのかミソラは顔を少しずつらした。

（かわいいなーミソラ……まだ起きないよね）

つつん

それからしばらくつついた後、最後にしようとしたときガブツツ

「い、いってー」

いきなりミソラがスバルの人差し指に噛みついた。

「いいはへんふふくつたい」（いい加減くすぐつたい）

「ミソラー！いつから起きてたの？てかもうはなしてよ」

「最初からおきてたよ、スバルがさきに起きたら私になんかするかと思っておきてた！」

「さすが人気アイドル……」

スバルはこのとき改めてミソラを尊敬した。

「それにしても大胆だねスバル？」

「なにが？」

ミソラは肘でスバルをつつきながら笑っている

「ぼけちゃって、私の寝込みを襲ったくせに」

「な、なにいつてんの！僕はただミソラを起こそうとしただけで」

「ふーん、ただ起こそうとしただけなら委員長たちにいつてもいいよね？」

「そ、それはーその……」

「さっそく着替えて委員長に報告しよつと」

「それだけは勘弁してー！」

「それは君の行動しだい♪」

そっぴい残してミソラはスバルのベッドから降りて出口に向かった。

「さ、準備して今日も一日頑張ろー！！」

「はぁー地獄だ」

こうして修行二日目が始まった。

二日目の始まり（後書き）

まず、僕の投稿を待っていた人たちには本当にすみません。

この小説の一話前を投稿した次の日に僕のスマホが壊れて修理していて投稿できませんでした。

明日からは3日に一話投稿できるようにしたいとおもいますので応援よろしくお願いします。

コントロール？（前書き）

なんとか間に合いました。

コントロール？

「コントロール3」

「お腹へったー。ほら、早くスバル！」

「もう、待つてってミソラ」

スバルとミソラは朝ご飯を食べに食堂に向かっていた。

「朝から元気だなーおまえ等は」

スバルがミソラを追いかけしていると通路の後ろから声をかけられた。

「あ、おはようございます。暁さん、クインティアさん。昨日はいろいろとすみませんでした。」

「気にするな。今日も頑張れよ！？」

「あたしも応援してるわ、ジャックを頼むわね」

「はい！」

「スバル早くー」

「ほら、彼女がよんでるぞ早くいつてやれ」

「それじゃ、またあとで」

スバルはミソラが待っている食堂の入り口まで走っていき、朝食をすました。

「ふうーごちそうさま！」

「相変わらず食べるねーミソラは……」

「スバルが食べないだけだよー！」

「そうかなー。時間もないし集合場所にいくのか！？」

「うん！」

スバルとミソラはエレベーターで地下のシュミレーションルームに向かった。

「「おはようみんな!!」」

「「「おはようスバル、ミソラちゃん!!」」」
しばらくするとヒロキとゆきなが入ってきた。

「よう!! みんないるよな?」

「まだ、ヤスがないよ!？」

「やすは今日は一日、博士たちの方を手伝うからこないよ」
「手伝うってなにを?」

「なんかプログラムを作るっていったたよなゆきな?」

「うん、今日はひろきに任せるっていったけど……」

「あいつなにもんなんだよ。」

「昔から機械いじるの好きだったからねー」

「そうだったな……さて時間もないし電波変換してさっさとはじめようぜ!!」

「「「うん(おう)」」」

「トランスコード、シューティングスターロックマン」

「トランスコードハープ・ノート」

「トランスコードジャック・コーヴァス」

「トランスコードジェミニ・スパーク」

「トランスコードオックス・ファイア」

「さてと今日やるのは自然の力の圧縮だ!! ゆきな頼む。」

「了解、アイスストーン」

ゆきなが手のひらにためた氷の力を床に押しつけると氷が岩のような形に凍っていった。

「まず、昨日みんなができるようになったとおもっけど、手のひらに自然の力を出したただけじゃ攻撃力はあまりないんだ。」

ひろきは説明しながら手のひらに雷の力をだしてゆきなが作った氷に当てた。

シュツツツ

「この通り氷を壊すことはできない。ここで重要なのが圧縮だ!!」
ひろきは手のひらに雷の力をだして小さくした。

「この雷球は大きさはさつきより小さいが……」

ひろきはさつきと同じように氷に当てた。

バチビリバチバチ

氷はバチバチと音を立てて壊れていった。

「圧縮することで大きさは小さくなってしまっけど威力は倍になる。こないだ戦ったエレキが使ってたのもこれとほぼ同じだ。」

「ほぼ？」

「あいつらなんかは圧縮して相手に当たる瞬間に解放っていうもう一つのコントロールを加えてるんだ。これのせいで威力は倍以上になる。今日はそれをできるようにしてもらおう。まず、手のひらで圧縮するんだ！それをしばらくキープしたままにする。」

スバルたちはひろきが説明した。

> 頑張れよスバル！！<

「ありがとうロック」

> ポロロン、ミソラファイトよく

「頑張るよ」

> ジャック俺らが一番になろうぜ！！<

「競争じゃねーよ！！」

> ツカサ……これは絶対できるようにするぜ！？<

「……大丈夫。ヒカルと同じ気持ちだから。」

> ブロロオ、ゴン太、おまえはとりあえずできるようにしろ<

「おう！！」

昨日の修行の成果で自然の力を手のひらに出すのはみんなできるようになっていたが、圧縮しようとする则自然の力の球体が消えてしまふのだ。今まで順調に進んできたがこれだけは何度やってもかわらなかつた。

「だめだ……また消えた。難しいなーこれ」

「ハハハ、そりゃそうだろ！？自然の力をコントロールする最終段階なんだからな！そんなに簡単にできたらやばいだろ？」

「ひろき……笑ってないでコツ教えてあげなよ」

「そうだな……いきなり氷を壊すほどの力を持ったのを作ろうとするんじゃないくて最初は少しだけ力をだして圧縮するんだ。それで感覚をつかんだら圧縮する量を増やしていくんだ。」

「それでもやっぱり難しいな―」

「うーんなんてアドバイスすればいいんだろうな……」

手のひらに出した球体の中心に力を集めるイメージって言えばわかる?」

「球体の中心にかー」

ツカサとヒカルがひろきのアドバイスを試してみようとしたとき、
(手のひらの球体の中心に力を試してみよう集める……)
シュツツツ

「いいぞー!!ふたりとも。もつと球体の中心に集める感じた。」

二人の手のひらには少しだけ圧縮された球体ができていた。

「やっぱり、雷は圧縮するのに向いてるんだな。」

「自然の力にも得意不得意があるの?」

「もちろん!正確にいうと得意なものがあるのよ。」

「へえーそうなんだ!!不思議―」

「俺らにもわかんないことがあるからなこの力つてのは。さて、修行をつつけるぞ!!」

「……おう!!」「……」

「やすの部屋」

>スバルたちの修行をみなくていいのかよ、ヤス?

ヨイリー博士たちに頼まれてたプログラムは作り終わってたんだろ?<
「修行の方はヒロキに任せれば平気だよ。」

>そりゃそうだけど……なに作ってたんだよ?<

「作ってるってゆつか修復してんだよ……修行の最終段階のためにな。」

>大変そうだな…なんか手伝うことある?<

「そうだな、なら……の……を作ってくれ。」

>わかったよつとく

コントロール？（前書き）

かなり短いです

コントロール？

「コントロール4」

「そろそろ腹へったな!？」

「俺はもうお腹と背中がくっつきそうだな!！」

「おめーのはいつもだろ!？」

「ハハハハ」

ジャックがゴン太をからかうとまわりにいたみんなの笑い声がシュミレーショナルームに響いた。

（ジャック……かわったな。あんなに笑顔で笑って。こんな幸せな時間がずっと続けばいいのに。）

「あんなやつらに壊されてたまるか!絶対に」

「なんかいったスバル!？」

「何でもないよ?」

「スバル、ミソラちゃん!!!ご飯食べにいこぜ!！」

「いまいくよ!！」

スバル達はお昼を食べにいこうと食堂に向かっていた。

「そうだ!！やすもよんでこようよ!！」

「そうだな……ゆきなよんでこいよ!？」

「うん、わかった!」

ゆきなは楽しそうに小走りでやすの部屋に向かっていった。

「ひろきくん、ゆきなとやすくんって……」

「お互い好きなんだろうけどな!まだ付き合っていないよ」

「そうなんだ!」

「俺らは先にいこぜ!」

「やすの部屋」

コンコン

「入るよ?やす」

中から返事が返ってくるのを待ってからドアを開けた。

「お昼ご飯食べにいこ？」

「いいけどちょっと待ってくれる!？」

「いいけど……博士たちとなに作ってたの？」

「俺たちのハンターってテレビ電話とメールしかできないだろ!？」

「そういえばそうだね。」

「だから、戦闘中とかにコミュニケーションをとることができるようにするための通信システムと味方がどこにいるかわかるようにするためのリーダーをつけるプログラムを作ってたんだよ。」

「へえー大変だね……」

「まあな……スバル達はとうだった？」

「みんな筋がいいから圧縮はできるようになったけど……解放がねー」

「やつぱりなー今日中にできればなんとかなるでしょ。さっ、飯食いにいこうぜ!」

「うん!」

やすとゆきなも食堂にむかって部屋を出て行った。

「おせーよ二人とも!」

「わりー、準備してたらおせくなっちまった。」

「早く食べよーぜ?」

「ゴン太はまた牛丼かよ?」

「牛丼はどんなに食べてもあきねーんだよジャック!」

「さ、食べよーぜ!頂きます」

「……いただきます」

それぞれ、自分が食べたいものを頼んで食べ始めたが、ひろき、ゆきな、やすは驚いたという顔でミソラをみている。

「どうしたの？」

「どうしたの?ってミソラちゃんそんなに食べるの?」

「うん、いつも通りだけど……」

驚くの無理はない。

ミソラの前にはとても女の子が一人で食べるとは思えないほどに料理がおいてあった

「さすがアイドル!!」

三人は思わず全く関係ないことを言って驚いていた

「さて、修行を始めるぞ!!」

圧縮ができて解放が出来なければ意味ないからな!?

「オー!!」

その後、4時間ずつと圧縮して解放する修行をしてやっとゆきなが作った氷を壊すことができた。

「俺もう限界だぜ!!」

「お疲れ様みんな!!」

「みんなよく頑張ったよ今日はもう終わりだ!!」

「自然の力をコントロールする修行はどんな時も集中するから疲れやすいんだよ。暁さんたちだって疲れてたよ」

「ああ。それより明日のことで報告があるから電波変換を解いて集まってくれ」

「了解!!」

全員が電波変換を解いて集まったのを確認すると暁が話し始めた。

「明日は9時から会議を行う。みんな遅れないようにな!?特にゴン太!!」

「俺?」

「ああそつだ。遅れた牛井は食べさせないからな!!」

「絶対遅刻しません。」

そこにいる全員が笑っていた

「お疲れ様今日は解散!!」

全員がシュミレーションルームから自分たちの部屋にむかっていった。

新しいプログラム（前書き）

遅れました。

ごめんなさい

後、『』は全員が言ったことです

新しいプログラム

「コントロール5」

> おい、スバル起きろ今日は9時から会議とかいうやつだろ？<

「う、うーん……おはよう、ロック、ハープ」

> ポロロン、おはようスバルくん<

> おう！！今日はやけにすぐ起きたな？<

「たまたまだよ！ミソラを起こさないと……」

スバルは隣に寝ているミソラを起こそうと体を揺すった。

「……だめだ起きないな。」

> 珍しいわねミソラがすぐに起きないなんて<

「……そうだ！」

スバルは何かを思いついたように部屋の冷蔵庫から氷を出した。

「ミソラ！！起きてよじゃないと……」

スバルはうつぶせで寝ているミソラの首のところに氷を入れた。

「……ひゃうつっ！！」

ミソラは変な声をあげながら起きた。

「冷たいなーに入れたの？」

「ハハハ、ごめん氷だよ」

「ひどいなースバル」

（ミソラ少し怒ってるんだろうけど……かわいいなー）

「聞いているの？スバル！！」

「え！？あ、聞いているよ」

> スバルくん今ミソラにみとれてたでしょ？<

「本当に！？」

「えーと、そのなんていうか……」

「正直に言ったらさっきの許してあげる。」

「ハープのいうとおりです」

「スバルったら恥ずかしがり屋さんだなーこのこの」

ミソラは自分の肘でスバルをつつきながらスバルをからかった。
二人ともとても幸せそうだった。

>じゃましたくないけど早くしないと朝飯食う時間なくなるぜ!？<

「やばい!!急ごうミソラ」

「うん」

二人は急いで着替えて準備をして食堂に走っていった。

「ふうーなんとか間に合ったねミソラ」

「そうだね」

スバルとミソラは朝飯をすまして会議室の前の廊下を歩いていた。

「遅いわよ二人とも!!」

中から久しぶりに聞く声が聞こえた。

「^{ルナちゃん}委員長!!」

「二人とも時間にもつと余裕を持って行動しなさい。」

「そうですよ。WAXAの会議何ですからね!遅刻なんて許されませんよ。」

「そうだ。キザマロのいうとおりだ。」

「……ゴン太は私とキザマロが起こしに行かなかつたら会議のこと忘れてたでしょう?」

「ごめん、委員長」

「次からもつと余裕を持って行動します」

「わかればいいのよわかれば」

「おはよう!!みんなサクサクサク」

そこにうまい棒を食べながら睨とそれをみてあきれているクインテ
イアが入ってきた。

『おはようございます。』

「おはよう……シドウいい加減食べるのやめなさいよ!」

「いいじゃないか!?!まだはじまってないんだから。」

> そうゆう問題じゃないですよシドウ！！子供達がみてるんですからねく

「わかったよ。」

そこにヨイリー博士と長官たちが入ってきた。

『おはようございます！！』

「はい、おはよう！！いいわねーみんな元気いっぱい私に若いころ……」

「博士、すみませんがもう始めましょう！」

「あらそうねどうぞ」

「それでは、これより会議を始める！今日は新しいシステム、S・N・S・P（スター、ナイト、シグナル、プログラム）の説明をしてもらう。博士お願いします。」

長官がそういうとヨイリー博士達が席をたち説明をはじめた。

「まず、このプログラムは

簡単に言えば星騎士団が連絡をするためのプログラムよ」

「博士、ハンターには電話などがあるのにそれいるのか？」

ゴン太が珍しくまともな質問をした。

「いい質問だねゴン太くん！！みんなは戦闘中に協力して攻撃をしたことあるかい？」

「それはもちろんあります！」

天地の質問に当然のようにスバルは答えた

「その時に敵の前で作戦をいたり、合図をしたりしていただろう？でもそれじゃ作戦の意味がない。かといってハンターについている電話などは戦闘のことをいっさい考えていない。そこでこの新しいプログラムの登場ってわけさ！」

天地は自信に満ちた声で説明をした。

「このプログラムをハンターに組み込めば電波変換中に誰と通信したいかと思うだけで通信が可能になったの。もちろん相手にはきこえないは。」

「そして通信がいにも新しい機能として仲間の位置がわかるレー

ダーがあります。このリーダーは普段は緑色の丸で位置がわかりませんが敵と遭遇し戦闘中になると赤色に、負傷した場合は黄色に敵は黒で表されます。」

『すげー！！』

「でもこの機能は敵が現れてもWAXAから情報をおくるか味方が遭遇しないとリーダーにはあらわれないの」

「この機能をみんなのハンターに組み込むために30分かかる。その間は各自休んでいてくれ。その作業がおわりしだいこないだ発表したグループに分かれて修行を再開する以上だ」

『失礼します』

これで2回目の会議は終わった。

コントロール？（前書き）

昨日、体育祭で遅れました

コントロール？

「お待たせ、みんなのハンターにS・N・S・Pのインストール終わったわよ」

『ありがとうございます！！』

ヨイリー博士達からそれぞれの自分のハンターを渡された。

「さて、こないだの発表したペアに分かれて修行再開だ！！」

『了解！！』

くスバル、やすく

「さっそく始めようかスバル？」

「よろしく！！でなにをするの！？」

「まず、腕に風の力をためる。次に腕を振り抜いてそれをとばす。もう一つは風を足に圧縮して次に解放する。この二つの修行だ。」

「そんなに？後二日しかないよ？」

「できるか分からないけど頑張るしかないよ！今日はとりあえずコツをつかむんだ！」

>おまえはそんなに弱気になるんじゃないやねーよく

「頑張るよ……。」

「その息だぜスバル！！」

くミソラ、ゆきなく

「よろしくね、ミソラ？」

「よろしく！それで何するの！？」

「ミソラには音の力を使って相手の位置をとくていすることと、攻撃につかうために音を圧縮して相手に当てるっていうのをできるよ」
うにするよ」

「……私できるかな？」

ミソラはいつものような笑顔でわなく、不安でいっぱい顔をして

いた

>ポロロン、ミソラ自信を持ちなさい！あなたなら大丈夫よ！！<
「ありがとうハープ。私頑張るよ」

「そうだよ、それに笑ってないとスバル君に怒られちゃうよ？」

「それはやだ！！」

ミソラはいつもの元気いっぱい笑顔に戻っていた

「ツカサ、ヒカル、ひろき」

「ひろき、俺らは何の修行をするんだ？」

「ツカサとヒカルにはエレキが使ってたスパークハンドとにたような技を覚えてもらう。あとはエレキソードとかかな！？」

「そうか、頑張ろうヒカル」

「任せとけツカサ」

二人は拳と拳をぶつけ合った。

「さ、始めるぞ」

「ジャック、クインティア」

「ジャック、あなたは炎を使ってスピードを上げることと攻撃使うために加工する修行よ」

「加工するってどんな形だよ？」

「それはあなたが見つけなさい！私はあなたに怒られアドバイスしできないわ」

「はあーわかったよ！！はやくはじめようぜ」

「そのいきよジャック！！」

「ゴン太、暁」

「暁さん、俺同ずればいいの？」

「ゴン太は火の力を足にためスピードをあげる。もう一つは腕に火の力をためて攻撃をあげる。後、俺のことは師匠とよべ」

「修行の内容はわかったけどなんで師匠？」

「ただ呼ばれたいからだ！！ゴン太今日からお前は俺の一番弟子だ」
「スバルじゃないのか？」

「いやお前じゃなければだめだ。」

「暁さん……いや師匠！！俺頑張るよ」

こうしてそれぞれのグループの修行が始まりみんな頑張ったのだがその日は技を完成される事ができず、それぞれがコツをつかんだだけだった。

WAXA襲撃（前書き）

遅れました。

もうすぐ部活が引退で終わるのが遅くてすみません

WAXA襲撃

スバル達が3日目の修行を終えて寝ているころやす、ひろき、ゆきな
の3人はやすの部屋に集まって話をしていた。

「ツカサとヒカルはどんな感じだ？」

「2人ともいい才能を持つてるけどまだまだだな……」

「……ゆきな、ミソラは？」

「ひろきが言ったことと同じね。スバルくんは？」

「あいつは俺らよりもいいセンスを持っていると思うけどまだ奴ら
と戦えるレベルじゃないな」

「暁さんとクインティアさんも同じような事言ってたぞ……でどう
する？」

「やっぱり計画してた通りにやろう。」

「暁さん達にはなんて言うの？」

「とりあえず長官に話したほうがいいだろう。」

「わかった。もう眠いから明日ね！？お休み」

「じゃ、俺も寝るよ、お休み！」

「ああ、お休み！」

2人が部屋からでるのを見送り、やすはベットに入った。

みんなが起きて朝ご飯をすましていつものようにシュミレーション
ルームにいくとしたとき放送が流れた

「緊急事態発生！！緊急事態発生！！各員持ち場につき星騎士団は
会議室に集まってください。繰り返します……」

「みんな、急ごう！！」

『おう！！』

その放送を聞いた隊員達は

自分の持ち場に走り始め、スバル達も会議室に向かって走っていった。

「長官、どうしたんですか？」

「おお、みんなきてくれたか。」

「奴らが攻めてきた……」

「攻めてきたってリメイクが？」

「ああそうだ。」

「でも、やくくんもひろきくんもゆきなだってしばらく攻めてこな
いって言うてたじゃん！？」

「うん、そうだと思ってたんだけど……」

「今、そんな事を考えていても始まらないだろ。とりあえず状況を
教えてくれ」

「はい、WAXAを中心に北、東、南、西に300メートル離れた
場所に一体ずつ、北に500メートル離れた場所に一体です。たぶ
ん一番離れているやつが司令塔だと思います。」

「よし、暁、クインティアが北に向かい……」

「長官、今回の作戦の指示は俺に任せてくれませんか？」

「なぜかな、やくくん？」

「俺やゆきな、それにひろきの方が自然の力をたくさんみてきてい
るからです。」

「なるほど、すじは通っている、今回はやくくに任せて手本とさ
せてもらおう。」

「ありがとうございます。さっそくですけど暁さんクインティアさ
んそれにやすとひろきにはWAXAに残ってもらいます。」

「なんで、俺もティアも残るんだ？」

「今、残ってもらうように言ったのは力のコントロールができるか
らです。建物内を破壊しないためです。」

「なるほど、了解した」

「スバルは北の司令塔、ミソラはその手前のやつをゴン太は東、ジ

ヤックは西ツカサとヒカルは南に行ってくれ。」

「みんな、S・N・S・Pのリーダーに敵の位置をつつしたわ。」

「よし、各自幸運をいのる!-!」

『はい!-!』

長官の言葉に返事を残して指示された敵がいる方へと向かっていった

東の戦い（前書き）

遅れてしまいました。

これから2週間くらいテスト前で更新できません。

東の戦い

ゴン太はやすに指示された通りに東にいる敵に向かって走っていた。
>プロロオ、ゴン太もうすぐ敵の姿がみえる。油断するなよ？<

「わかってるって！！さてとリーダーだこの辺だな……………」

ゴン太は岩などがゴツゴツと飛び出ている平地で敵の姿を探していたがしばらくすると、以前学校を襲ってきたマグマとエレキが着ていたような黒いフード付きのコートを着て、片方の手には大きな鉄球を持った大きな姿のウィザードがいた

「あいつがそうだけ………… あいつ動けんのか？」

ゴン太がこんな事を考えるのも考えるのも無理はなかった。
なぜなら、敵はゴン太が近ずいてきてもまったく動かず石のような色をしていてまるで石化しているようだった。

>ゴン太、今のうちに攻撃しちまえ！！動かずに止まってるんだっ
たらチャンスだ<

「え！？それはさすがにそれはひどいぜ？」

>ゴン太お前の優しさはすごいが戦いでは油断したほうが負けるんだ。だから戦いに卑怯なんてないんだよ<

「わかったぜオックス！！食らえオックスファイア！！」

ゴン太は石化しているウィザードに自然の力のおかげで今までより威力が上がったオックスファイアをぶつけた。ウィザードは動こうともせずにそれをくらった。

「やったなオックス！！早くWAXAに帰ろうぜ！？」

>そうだ…………… ゴン太よけろ！！<
「え！？」

>キングダムクラッシャー！！<
いきなり石化して炎につつまれていた中から鎖のついた鉄球が飛んできた。

「あぶねーなあれ、なんなんだ？」

> ブロロオ、大丈夫かゴン太？<

「ありがとなオックス、お前のおかげで少し鉄球の針がかすっただけだよ」

> 油断したほうが負けるんだと先ほど自分たちでいつていたな？そのままその言葉をかえさせてもらう。<

そういいながらさっきの石化していた時の灰色とは違いいまは少し薄い紺色に変わっていた。

> 我が名はナイトマン。ある人物に頼まれてあの施設を壊しに来た<ナイトマンは鉄球を持ってない手でWAXAを指差していた。

「お前何とかって言う組織か？」

> 俺をやっとつたやつがこれを着ろって言ってたな。<

「さっきの攻撃はずれたのか？」

> あんな攻撃よける必要もない。<

> あのやるー、言うだけいいやつて。やっちまえゴン太！！<

「おう！！いくぜオックスタックル！！」

オックスファイアはナイトマンに向かって突進していった。

> そんな攻撃通用しないと云ったはずだ。<

オックスファイアの頭についている二本の角をつかんで止めた。

> オックスファイアと言ったな？お前にいいことを教えてやろう。

お前や私のようにスピードが遅いもの同士が戦った場合何の違いで勝負が決まると思う？<

オックスファイアは角を捕まれたまま質問された。

「うーん……経験かな？」

> 確かにそれもあるかも知れない。だが違う。大きく勝負を分けるのは……攻撃と防御だ！！<

ナイトマンが話し終わった後、鉄球のついている方を振りかぶった。> ロイヤルレッキングボール！！<

ナイトマンは振りかぶった鉄球をおもいきりもう片方の手でつかんでいるオックスファイアに当てた。当然それをよけようとオックスファイアも暴れたがナイトマンの攻撃をよけることもできずに直

撃てしまった。

>ゴン太ツッ!!<

オックスファイアはものすごい勢いで飛んでいき地面に何度もバウンドしてやっとなった。

>ゴン太!!おいしっかりしろ!!<

「ゲホツゲホ」

オックスファイアはせきをしながら膝をついて起き上がった。

ナイトマンはそんなオックスファイアに一歩一歩ゆっくり近づいていった。

>どうだ?もう終わりにしよう。お前はここでおとなし死ぬがよい。お前はあの攻撃をよく耐えたものだ。<

「…ひとつ聞いてもいいか?」

>内容によつては答えてやろう。<

「これから……どうすんだ?」

>私のミッシヨはWAXAという施設を破壊することだその後は確か…コダマタウンを破壊することになっている<

ナイトマンは鉄球を振りかぶった状態のままオックスファイアに答ええた

「……ろよ!!」

オックスファイアは小さな声だが力のこもった声で言った

>何か言ったか?<

「やめろって言ったんだよ!!」

今まで消えそうだったオックスファイアの火が一気に吹き出し始めた

>まだやるのか結果は分かっているだろう?<

オックスファイアが起き上がってもナイトマンは一行に焦っていない。

「俺があきらめたら俺が好きな町が…俺の大切な友達が死んでしまうだろう?そんなことさせないぜ?」

>なるほど、だがお前が私を倒さねば同じことだぞ?<

「そんなのわかってるぜ!!」

> ならばもう一度くらえキングダムクラッシャー！！<

オックスファイアはさっきとは違い飛んできた鉄球よけようとはしなかった

「いくぜ！！ジェットパンチ！！」

オックスファイアは肘の所から火を吹き出し、そのいきおいで鉄球を殴った。

鉄球は激しい音とともに割れていつてしまった。

> な、なんとということだ！！<

さすがにナイトマンも動揺していた。

「まだまだ！！ジェットスピード」

今度は足のかかとかかと火を吹き出し、あの体からは想像できないスピードでナイトマンの前に移動して……

「ジェットパンチ！！」

> なんのストーンアーマー！！<

ナイトマンもすぐに冷静差を取り戻し、体を石のようにした。

さっきとは比べものにならないような音が響きナイトマンはそのまま膝について倒れていった。

「やった、やったぜオックス……」

ゴン太も電波変換時その場で倒れてしまった。

南の戦い（前書き）

2、3週間つていいながら1ヶ月たつてしまいました。
いつもすみません。

これから最低でも5日に一話でいきます

南の戦い

「南の戦い」

> ツカサあそこに立ってるやつがそうじゃねーか？<

「うん、リーダーの位置的にも多分そうだよ」

> さつさとかたずけて一番つえーのと戦いにいこうぜ！！<

「だめだよ、やす君の指示通りに動かないと…それにスバル君が戦いにいってるんだから」

> わかってるって！！だからちゃちゃつとやっつけて早くこいつらのボスを倒しにいこうぜ！！<

「そんなうまくいくのかないと思うけど……。早く始めようヒカル」

> おう！！ってあいつどこ行っただ？<

> 君たちがWAXAの人達か……。悪い任務なので消えてもらっぞ！！<

黒いマントをきたウィザードはジェミニBの後ろに移動した。

> いつの間に移動しやがったんだ！！<

ジェミニBは相手と距離をとり戦闘態勢にはいった。

「大丈夫、ヒカル？あのウィザードすごく早い」

> なんとかな、油断するなよツカサ！！<

「私はカーネル。ある方からの任務でWAXAを破壊しなってきた。任務の邪魔をするなら容赦はしない」

「誰の命令だ？」

> 任務の内容は話さない、いくぞ！！<

そついうとカーネルは剣を構えてジェミニたちのほうへ向かっていった

「くらえロケットナックル」

ジェミニBは拳を前に出し自分達に向かって走ってくるカーネルに向かって拳を発射した。

カーネルはスピードを落としもせずに飛んできた拳をよけた。

>こんなもの当たるものか!!<

カーネルは拳を飛ばして動けないジェミニBをきろうとしていた
>ツツチ!!<

「エレキソード!!」

カキーン

その場に剣と剣がぶつかり合い高い音が響いた。

「僕のこと忘れてない？」

ツカサ少し笑いながらカーネルを見た。

その笑みに答えるようにカーネルも少し笑った用に見えたあとカーネルの姿がきえた。

「え!？」

これにはツカサも驚きすきを作ってしまった。

>ツカサ後ろだ!!<

>もう遅い!!<

ザシュツツ!!

「く……………」

ツカサはうしろからカーネルに剣で切られて膝をついてしまった。

>ツカサ!!<

>すぐにお前もあのこのところに行ける安心しろお前らの次はあの施設の人達だ。まずはこいつに留めをさすとするか<

カーネルはそういうと剣を振り上げた。

>くそつ!!<

ザシュツツ!!

「ヒ、ヒカ、ル……………」

>……………あとは頼んだぜ<

なんとヒカルがツカサの上にかぶさり、カーネルの剣を受けていた。

>仲間を守ったか…………でもお前も動けないだろう。<

カーネルはもう一度剣を振り上げた

「エレキチャージ!!」

ジェミニ二Wがそういうとジェミニ二Wのまわりに電気が集まりジェミニ二Wの傷を直していた。

> 傷を治す技か……だがもう遅い！<

カーネルは剣を振りかざした。

パシッッ

> な、なに！？<

ジェミニ二Wは動けるようになった左手でカーネルの剣をうけとめていた

「これであなたはよけない。エレキボール！！」

ジェミニ二Wは開いている右手に電気を集めカーネルに当てた。

> やるな……ここまでできたら上出来だ<

カーネルは素晴らしい残り消えていき、ジェミニ二Wは電波変換がとけてその場に倒れてしまった。

西の戦い

「西の戦い」

> ジャックどうやらあのマント野郎がそうみたいだぜ！？<

「そうみたいだな…コーブラスいくぜ！！エアロダイブ」

ジャックコーブラスは黒いマントを着てたっているウィザードの死角から自分の出せる最大のスピードで敵に突撃していった
カキーン

鉄と鉄がぶつかり合う高い音が響いた。

「チツ、今のを止められちまったか…お前誰だ」

> 俺はブルース。お前は確かジャックコーブラスとかいったなお前
それでスピードに自信があるのか？<

「どうゆう意味だ？」

> 俺の死角から攻撃してきたのに俺を倒せてないのがすべてだろ？<
「な、何だと！？」

> 本当のことをいったまでだ。本当のスピードを見せてやろう<
そういうとブルースはジャックコーブラスの前から距離をとりコーブラスの周りを円を描くように移動した。

> なんだあいつ？………な、なに？！<

「な、なんだあいつ増えたのか！？」

> これは自分のスピードの速さで移動し残像が出来る本体は一体だけだ。<

「そういうことか。なら順番に攻撃するだけだ！！ペインヘルフレ
ーム」

ジャックコーブラスは紫に燃える炎をブルースの残像に順番に当てていった。

> 無駄だ俺は常に相手の攻撃からよけながら残像を作っている。お
前の攻撃はあたらない<

「くそっ！！だが空に飛んじまえばお前の剣は届かない」

ジャックコーブラスは自分の翼で空に羽ばたいた。

>ふん、フミコミザン！！<

「な、なに！？」

ブルースの残像が消え一体もいなくなりあたりを探していると目の前にブルースが現れた。

>俺の剣に死角はない<

「くそっ…………俺はまだ恩返ししてないんだよ、くそ」

>とめだ<

>ジャック、ジャックよけろ<

「足に炎をためて一気に解放する……………」

シュツ

>消えた？<

ズシュツ

>いつのに…………<

「フレイムネイルってわざだ…………速さが上がったのはあんたのおかげだ」

>俺の任務はない終了した<

ブルースはそっくり残り消えていった。

「コーブラスあいつ今なんていった？」

>俺のなんとかは終了だった<

「あいつなんなんだったんだ……………」
ドサツ

ジャックはその場で倒れてしまった

北の戦い（前書き）

遅れました

夏休みは数回しか更新できないとおもいます

北の戦い

「北の戦い」

「スバル、敵の反応はこの辺だよね!？」

「うん　リーダーをみてもこの辺にいるんだろうけど　ここじや隠れる場所がいっぱいあるから」

スバルとミソラはWAXAから300m離れた木がたくさん生えた場所にいた

>スバル、気配をかくしてどこにいるかわからねえーがなんかいやがる……<

>ポロロン、私も少しだけかんじるは気をつけて二人とも<

ウォーロックとハープは戦闘経験が多いために相手が気配を消していても感じる事ができた。

その二人が少ししか感じる事ができないということはとても強い奴なのだろう

「スバル先に行って!!」

「っえ!？」

「スバルはこの先のリーダーを止めて!!」

「でもここに居るやつは強いみたいだし……」

「……スバル、修行してたのはスバルだけじゃないんだよ?私を信じれない?」

>スバル、ここはミソラの奴に任せてやれ<

「ロック…わかった。ミソラ危ないと思ったらずくに逃げて。敵はリーダーを守る役目のやつだ。これだけは絶対に守って」

「約束するよ!!」

スバルはそこからさらに北にいるリーダーの方へいった

「さてと、何であなたロックマンを行かせてくれたの?あなたのそのライフルなら狙えたでしょ?」

ミソラは姿の見えない敵に話しかけていた

> お前、私が見えてるのか？<
すると敵の姿は見えないが答えが返ってきた。

「まだ練習だからあまり遠くまではできないけどね」

> すごいはミソラ！！<

「ずっとこれの練習してたからね」

パシュツツ

するといきなり草影からいきなり弾が飛んできたそれをミソラはギリギリでかわした

> 見えているというのはほんとうか……私はサーチマンお前らを殺しにきた<

「サーチマン、誰の命令なの？」

> それは教えられない。サーチショット！！<
パシュツツ

「狙っている場所が分かればよけられる、ショックノート！！」

> もうそこにはいない。今度はよけれるかな？プレスショット<
パシュツツ

「何ださっきと同じじゃん！？」

ミソラはさっきの弾と同じように体をそらしてよけようとした。
だが弾はハープノートの手前で弾が6発に分かれた

「く、インパクト・ゾーン！！」

ミソラは手を前に突き出して衝撃波を出して弾を落とした
だが、すべて落とすことはできず2発当たってしまった

> すごいがそれが限界だろ？次で終わりだ。カーネルアーミー<
サーチマンがそういうと次々に小さな兵隊が出てきてた

「かこまれてる……スバルの約束守れるかな」

> 次はよけない。オールサーチショット！！<
ハープノートを囲んでいた敵が一斉に弾を発射した

「一か八かだけど……手に力を集めて……インパクトゾーン」
カランカラン

地面に弾が落ちる音がした。

「く、全部はダメだったみたい」

ミソラは腕に2発受けていたがまだ。

「あそこかな……インパクト・キャノン」

>ぐはぁっく

バタッ

「やっつけたみたい」

バタッ

ハーブノートは電波変換を解いて倒れてしまった

ヒーローVSリーダー

>スバル、気をつけるあいつ相当できるぞ!!<

「うん、多分さっきの奴よりも強いみたい……」

スバルとウォーロックの前には黒いローブを着てそれについているフードで顔をかくしているウィザードがたっていた。

>スバル、わかってると思うがミソラの奴の応援なんて考えて戦つてるとやられるぜ!?!<

「わかつてる……なんとしてもこいつをここで止めないと……いくよロック!!」

>オウ!!<

ロックマンは黒いローブをきたウィザードの少し離れた場所に降りて戦闘態勢をとった。さっきは遠くて解らなかったが黒いローブ奴は白く赤いラインが入った目つきが悪い仮面をかぶっていた。

>君がこの時代のロックマンだね、スバルくん?<

「え、この時代のつてどうゆうこと?それになんで僕の名前知ってるんだ!!」

>スバル、落ち着け!!あいつ等はWAXAにのりこんでお前の名前を調べたんだ、それにこないだあった奴らの仲間なんだから当然だろ!<

その言葉を聞いていた相手がしゃべった

>それは違うよウォーロック……

僕は君たちにあったことがあるんだよ?<

「あったことがあるつて……」

>へっ!!お前みたいな仮面野郎なんかしるかよ!!<

>ひどいなー仮面野郎つて……まっしょうがないか……<

「お前、だれなんだよ!!」

>僕の名前ね………Rとでも

言っておこうかな？<

敵は完璧になめていた。

>なめやがってえ！！スバルいくぞ<

「うん！！エアーショット！！」

ロックマンは風の力を圧縮した弾をRに向かってうった

>報告通り君はもう自然の力を使えるのか……<

それをRは最低限の動きでかわして……

>ライトソード！！<

白くうつすらと輝いている剣を出してロックマンに突っ込んできた

「くつつ！！エドギリブレード！！」

ロックマンはRのライトソードを自分の剣で止めたが……

パリンツッ

「な、エドギリブレードが割れた！？」

>スバル、バトルカードはやっぱりだめみたいだな！！<

「うん、自然の力を使う奴には駄目だね！」

>それは違うよスバルくん……君たちはまだ自然の力を完璧にコン

トロールしていないだからバトルカードが弱くなってしまう。見せ

た方が早いかな……エドギリブレード！！ほら攻撃してきなよ！

！<

ロックマンはRの目の前まで走ってジャンプして…

「グレートアックス！！」

落下の勢いも利用してアックスでRに攻撃した

ガキン

ものすごい音がしてさすがにエドギリブレードは折れてRも攻撃を

食らったと思ったが……

>スバルくん……自分のアックスを見てごらん！？<

そう言われて自分のアックスをみると大きなヒビが半分近くまで入

っについてRのエドギリブレードはほぼ無傷だった。

「な、なんで！！」

>すごいでしょ？バトルカードに自然の力を送るとこんなに威力が

あがるんだよ？<

「エアースョット!!」

>ライトショット!!<

Rは光る白いたまをうつとそれはロックマンのうったエアースョットをはじき、ロックマンに直撃した

「ぐはあっつ!!」

ロックマンはもろに当たってしまい、倒れてしまった。

Rはゆっくりと近いてライトソードを振り上げた

「今だ!!チャージエアースョット」

ドゴーン

さっきよりも数倍でかいエアースョットを至近距離でくらい倒した
と思ったが……

>さすがスバルくん……今のはちよつときいたよ<

Rは無数の傷がついているものの致命傷は負っていなかった。

「バトルカードエドギリブレード!!」

>スバル、それはきかないだろ？<

「風の力をバトルカードに送る……」

スバルはウォーロックの声が届かないくらいに集中していた

>もう、時間もなし最後かな!?ライトソード!!<

Rはライトソードを出してロックマンに突っ込んだ。スバルもRに突っ込んでいった。

パキーン

Rのライトソードは消え、ロックマンのエドギリブレードはヒビが少し入っただけだった。

>さすがスバルくん、ちよつと教えただけでできるなんて……<
ポツ

Rが付けていた仮面が少し割れて地面に落ちてRの顔がはっきりと見えた。

「君は……!!」

>オイオイ冗談だろ!?!<

「久しぶりだね！？スバルくんウォーロック」

> 「ロックマンEXE！！」<

> 詳しいことはWAXAで話すよ！ほら、みんな待ってるよ<

「え、でも……」

> 大丈夫、もうWAXAを壊すなんてしないし、僕のミッションも
終わったから<

> どうなってるんだ？<

> WAXAにいけばわかるよ！！<

ネタバラシ（前書き）

待っていてくれた方すいません。あとがきで理由をかきます。

ネタバラシ

「ネタバラシ」

今、スバルはロックマンEXE（以下ロックマン）の言う通りにWAXAに帰ってきた。

「ロックマンどこにいればいいの!？」

>WAXAの新館の会議室に行つてく

>オイオイどうゆうことなんだよ!？早く説明しろよく

>もう少し待つてよウォーロック会議室で説明があるからく

チーン

エレベーターの中で話しているうちに会議室のある階についた

コンコン

「失礼します!！」

ガチャン

『スバル（くん）!!無事だったか（のね）』

「みんな大丈夫!？けがとかしてないの?どうゆうこと何ですか長官!？」

「スバルくんまず落ち着いてくれ。いま、やすくんから説明がある

……」

長官がそういうと全員の視線がやすの方へむき、やすは席を立った。

「まず、みんなごめん!！」

この言葉に全員が驚いた。

「今回のWAXA襲撃はおれが起こした……」

「なんでそんなことしたの!？」

ミソラがみんな疑問に思っていた事を聞いた

「スバルやミソラちゃん他のメンバーも自然の力をだいぶコントロールできるようになってきた。でもまた戦闘に使つてくのは威力が足りない。威力をあげるのはすつごく時間がかかってしまう。俺たちのときもそうだったんだ」

やすの隣でひろきとゆきながうなずいていた

「だけど、今は時間がない。戦闘に使えるくらいまで修行してたらリメイクの奴らにホールプログラムを集められてしまう。そこで思いついたのがスバル達をギリギリまで追い込めば一気に成長するっていうかけだつた。そのために200年前の英雄たちを再構築させて、リメイクが使っているコクーンとにたようなのを作って電波変換して協力してもらつた。」

「そうゆうことだつたのか……でもなぜ俺やティア、隊員たちには言わなかつたんだ？」

「それは……」

「暁くん、それは私が提案したんだよ。君たちの訓練にもなるだろうと考えてね」

「そうゆうことだつたのか……」

「みんな本当に騙して悪かつた」

やすはもう一度みんなに頭をさげた。

「もういいよ、やすのおかげでまた強くなれたんだ。ね、みんな！？」

「もちろん！」

「あたりまえだぜ」

みんなやすを怒つたりせずむしろ感謝していた。

「ありがとう」

「それと確か他にもやすくんから報告があるってきいたんだが……」

「はい……これを見てください。ウィザードオン！」

なんと現れたのは暁とともに消えたはずのジョーカーだつた

「この前、暁さんにハンターがおかしいって言われたんで見てみたら残骸データが残っていて……再構築しました。」

>久しぶりだな……シドウ<

「……ああ、お前のせいで危うく死ぬところだつたがな」

ジョーカーは暁の方に歩いていきつた。会議室には重い緊迫した空気がなつた

> …… あのと看はすまなかつた。あの後、俺は間違っていることにきずいたがもう遅かつた…。爆発を止めるのは無理だったが威力を弱めるしかできなかった……<

「………… お前、これからどうするんだ？」

> 暁、ヨイリー博士、それにあの金髪の女、が許してくれるなら私は迷惑をかけてしまった人たちに恩返しをしたい<

「お前、本当か！？」

暁は少し疑いながらも驚いていた

> 本当だ……<

暁は少し考えて

「わかつた………… だが他の二人にも謝れよ」

> そのつもりだ……<

今度はヨイリー博士のところにいき

> ヨイリー博士………… 本<

「お帰りジョーカーちゃん。私も

あの時はいけなかつたあなたが勘違いするような言い方で破壊するなんていつたから……」

> 博士………… 私はあなたを信じるこゝろができなかつた。そこをキングに利用されてしまった。本当にすまない<

「いいのよ。私もごめんなさいね」

> もう一度あなたの助手としてやらせてもらえないか？<

「もちろん喜んで…………」

ジョーカーは次に端の方に座っていた委員長の方へいった
全員が心配しながらみていた。

ジョーカーは委員長の前で膝をつき

> 白金よお前には恐い思いをさせてしまった………… お前が許せないというなら…………<

パシッ

委員長は自分の右手で思いつきりジョーカーの頬を叩いた

「あーすつきりした！！今ので許すわジョーカー！！」

委員長は笑いながらジョーカーにいった

> ありがとう。白金<

「これで決まりだな。ジョーカーには博士の護衛とホールプログラムの探す手伝いをしてもらう。今日はもう遅いからWAXAに泊まって明日はゆっくり家で休みなさい。」

「あれ、でも明日は学校がはじまるんじゃないや……」

『あー!!』

スバルが思い出したように言った一言でみんなが思い出しどうしようとして慌てていると

委員長とキザマロが少し笑いながら

「それなら心配いりませんよ!？」

「あなた達に言っただけでなかったけど、学校の破損が予想以上にひどいみたいで今週の木曜日まで休みになるそうよ。」

「そうだったんだ……」

学校が休みとやることをきいてみんなとても安心していた

「それではみんな疲れただろうきらもう休みなさい。解散!」

『はい!!』

ネタバラシ（後書き）

夏休みの間こうしんどできないと報告しておきながらも11月の終わりになつてしまいました。

私は一応今年大学受験なのですが自分がなにをやりたいのかすら決めていなかったのていろいろと真剣に考えて行動に移したりしているうちに今日になつてしまいました。

今までこの小説の更新を待つていてくれた方には大変悪いことをしたと反省しています。無事大学からの合格ももらうことができました。また、更新を再会していきたくて考えています。こんな僕が書いた小説ですが一生懸命考えてかくのでこれからも応援しながら読んでもらったらうれしいです。

帰宅（前書き）

お待たせしました。

帰宅

スバル達は昨日の実戦練習の後にWAXAの新館の宿泊施設で休んだ。

この部屋に泊まるのも昨日が最後だったので今は各自の部屋で片付けをしていた。

「ふうー。これで荷物整理おわりだ。」

> だいたいそんな荷物いらなかっただろ？<

「確かに・・・。」

ウォーロックが言う通りスバルの持ってきた荷物は結構な大きさだった。

コンコン

「スバル終わった？」

ウォーロックとスバルが話しているとちょうどミソラが入ってきた

「今終わったとこ。って何その荷物!？」

スバルが驚くのも無理はない。

多すぎたと反省しているスバルの荷物の大きさを軽く越えている。WAXAにくる時の電車の中では委員長達にいろいろとミソラとの関係を質問されたのでそんなことを気にしている余裕がなかったのだ。

「分かってないなあースバル!! 女の子にはいろいろと持ってたなぐちゃいけないものが多いーんだよ!？」

「そうなの!？」

スバルはミソラの説明で納得しかけたが、ハープが出てきて・・・> ポロロン、何言ってる暇な時間にスバルくんとみんなで遊ぶんだって言ってたのはどこの誰でしたっけ!？<

「うー、バレたか」

「ハハハ、ミソラらしいけど・・・そんなひまなかったね」

「予想以上に力のコントロールってつかれたかね」

>確かに二人ともよく頑張ったわよ。<

>ああ遊ぶのは家帰っておふくろに顔見してから遊べばいいじゃないか<

「うん、そうしよスバル!」

「そうだね、みんなに挨拶して帰ろうか?お父さんには会ってたけどお母さんにはあってないし、心配してるだろうから」

「そうと決まればレッツゴー!」

「司令室」

スバルとミソラは修行を手伝ってくれた人たちに挨拶するために司令室にきていた。

「失礼します!!」

自動ドアが開いた先にはヨイリー博士やシドウ、それに長官やクインティアなどが仕事をしていた。

「お!?荷物整理おわたのか!」

「はい!!これからみんなに挨拶して帰るところです!!委員長ややすくんたちは!」

「ああ白金達はゴン太のいつも行ってる店に牛丼を食べにいったそのままかえるからつてよ。やすとひろきとゆきなは・・・」

シドウが説明している最中に後ろの自動ドアが開いた。

「おはようみんな」

「おはよう!!」

「ふたりとも疲れはとれた?」

「うーんまあまあかな?」

「私も・・・」

「俺やひろきもゆきなも最初はすごく疲れたからなしょうがないよ」
「今日は家でおとなしくしてたほうがいいよ?」

「さすがにそうするよ、ねミソラ？」

「もちろん！！」

「案外二人とも元気じゃんか？俺らもこれからかえるけど一緒に帰るか？」

「そうしようかな。暁さんそれに長官、博士、他のみんなもありがとうございました。」

「ありがとうございます♪」

「ああおつかれ！！」

「また何か合ったら連絡するからそのときはたのむぞ！？」

『はい！！』

スバル達は修行に協力してくれた人達に挨拶をして家に帰って行った。

「じゃっ俺たちこっちだから・・・お疲れ！！」

「三人ともいろいろありがとう！！また学校でね？」

「またねー♪」

スバルとミソラはやす達と分かれて家の中に入っていった。

「「ただいま！！」」

久しぶりに家のドアをあけ元気に挨拶すると、キッチンから茜がいつものように笑顔で出てきた。

「お帰りなさい、ふたりとも・・・どうだったWAXAの練習は？」

スバルは気のせいだろうか、茜の最後の質問に少し違和感を感じたが・・・

「うん、大変だったけどなんとかあったから大丈夫だよ？」

「そう・・・ミソラは？」

「私も大丈夫だよ？どこも怪我とかしてないし・・・」

スバルとミソラが質問に答えると、茜は元の笑顔になり

「ならよかった。お昼にしましょうか！？おなかえってるでしょ？」

スバルとミソラは昨日の実戦練習で初めて自然の力を解放した。それにより起きたのは正午より少し前、それから荷物整理などしたりしてもうお昼を軽く越えている。

茜はスバルとミソラが帰ってくるのを知っていたのでわざわざ二人をまっていたのである。

「うん！私もうおなか減って死にそう」

「そういえば朝からなにも食べてないや・・・」

「フッフ、だと思ってスパゲティたくさん作つといたわよ？」

「うわぁー早く食べよう！？」

ミソラはテーブルまでスバルを引っ張り連れて行った。

>ポロロン、あの二人元気ねえー<

>全くだ。四日間ずつと電波変換してたからさすがにつかれたぜ！<

「ハープちゃんもウォーロックくんも

二人を守ってくれてありがとう！！大変だったわね？」

>いえ、なれてますから<

>おふくろだけだぜそう言ってくれるの！！<

「フッフ、後ウォーロックくんのいつも見てる刑事ドラマちゃんと

録画してあるからね？」

>本当か！？感謝するぜおふくろ<

「お母さん早く食べよう！？」

ミソラがフォークをかた手に茜を呼んでいた。

「はいはい」

その後は久しぶりの茜との食事をたのしんだ。

「「ごちそうさまでした！！」」

「おそまつさまでした」

二人が茜のちくつてくれた昼食に感謝し、食器をキッチンに運んだ。

「お母さん、私手伝うよ」

「ありがとう、でも今日は疲れてるだろうから私がやるは。スバルは後から行くか先に部屋に行つてて？玄関の蛍光灯の調子が悪いか

らスバルに見てほしいのよ……」

茜は玄関の蛍光灯を指差しながらいった。

「え、でも……」

>ポロロン、ミソラ先に部屋でまってましょ！？無理に洗い物やって迷惑かけるのやでしょ？<

そこにハープが出てきて茜の顔を見るなりなにかをさとったのかミソラを上に向けて行った。

「上にいるよスバル？」

（助かるはハープちゃん）

茜はハープの気遣いに心の中で感謝していた。

「……どうしたの母さん？蛍光灯の調子が悪いって嘘なんかついて」

「あら、あなたも嘘だつてわかったの？」

「そりゃわかるよ？……父さんが帰ってくるまでいつも自分で代えてたし……」

「それもそうね……」

この後しばし沈黙が続き茜の顔が真剣な眼差しになった。

「スバル……あなたまた戦うつもりなの？」

「え、いきなりどうしたの？」

「いいから真剣に答えて！！」

いつも茜らしくない口調でスバルに問いかける茜にスバルは少し驚いた。

「母さん……ごめん、僕は……」

スバルは下を向いてしまう。

「スバル？私の顔を見て？」

スバルは茜の言葉に反応し、顔を上げる。

「あなたが戦うつもりなのはわかってるは……スバルのお母さんだもの……でもスバルが戦う理由をしりたいの。スバルはまだ中学生なのよ？」

スバルは茜の質問に対して少し考えてから口を開いた。

「僕はもう二度と大切な人をうしないたくない。父さんが行方不明になったときの気持ちなんてもうごめんだ！！僕はもう誰も失うようなことはさせない。やっとたくさんの絆ができたんだ。僕はこの絆を守りたいんだよ。僕にその絆を守ることができる可能性を持っている力がある限りウォーロックと一緒に戦っていくよ。」

>よく言ったスバル！！それでこそ俺様の相棒だ！！<

「・・・それはスバルの意志なのね？」

「うん、ごめん母さん・・・」

「わかったは、ロックくんこれからスバルをたのむわね？」

>おう！！任せとけ<

ウォーロックは自分の手で拳を作り胸をたたいた

「スバル？」

「なに母さん？」

「これだけは約束して。なにがあってもスバルとミソラ、それにロックちゃんとハープちゃんの四人、誰も失うことなく帰ってきてなさい！！」

「約束するよ」

「ならいいは・・・ミソラ聞いてるんでしょあなたも約束して？」
茜がそういうとリビングの扉が開いた。

「気づいてたの？」

「え！ミソラ上にいたんじゃ・・・」

「大声が聞こえたから降りてきたんだけど・・・出るにでれなくて」

「心配かけたわねもう大丈夫よ！二人とも上で遊んでなさい今日の夜は久しぶりに家族全員で食べるんだから頑張らないと」

そついうと茜はキッチンに戻って洗い物を始めた。

その後スバルとミソラ晩飯までトランプやゲームをしたりして遊んだ。

そして、大吾が帰ってきて久しぶりの家族全員の食事を楽しんだ。今はもうねる支度をしてスバルの部屋にいる。

「はぁー……やつぱり一緒に寝るの?」

スバルが布団に入ろうとしているとミソラが当たり前のように布団に入ろうとしていた。

「もちろん!!約束したじゃん♪」

「わかったよ。」

>ポロロン、お楽しみのところ悪いけどスバルくんたちにナンゴク島のこといったの?<

「あ、忘れてた!!」

>だと思った……<

「なに、ナンゴク島って?」

「マネージャーの金田さんがくれたの。友達と思い出作るのに使ってくれて……」

「へえー、なら早めに委員長にメールしたほうがいいんじゃない?」

「うんそうする」

ミソラは返事をするとはンターを取り出し委員長にメールを打った

「……これでよしと!!」

「なんて送ったの?」

「GWにみんなで旅行に行く計画をたてようって」

ピピピ

「もう返信かきた!!」

「ちょうどよかった、私もそう思ってたみんなにメール送っていたのよ。あした水野くん家に9時頃にこれるかしら?」

「どうする?」

「?ついてるけどこないと殺されそう」

「わかったよつと……送信!」

「さてともう眠いから寝ようか?」

「うん!!」

ミソラはスバルの横に入るとじつとスバルの顔を見つめていた

「……なに?」

「エヘヘヘ、お休みのキス」

ミソラは少し顔を赤くしながらスバルに言った。

「わかったよ。」

「え!？」

ミソラはスバルが照れると思ったのに意外な答えが帰ってきてキスをされたので驚いてしまった。

「お、おやすみ!！」

「おやすみミソラ」

（焦ってる。かわいいなあーミソラ）

いつものしかえしをして楽しんでいるスバルだった。

帰宅（後書き）

次は金曜日に更新します。

旅行計画（前書き）

ちよつと、てかかなり短いです。

旅行計画

（旅行会議）

「う、うーんよく寝た！」

ミソラは布団から体を起こし、大きくのびをした。

> ポロロン、おはようミソラ<

「おはようハープ。今何時？」

> 今、ちょうど8時よ？もうそろそろスバルくんを起こさないと遅刻するわよ！？<

> スバルもこのくらい早く起きてくれると助かるんだけどな、ミソラ頼むぜ！？<

「まかせて……」

ウォーロックのお願いに返事を返すとミソラはスバルの顔を見ながら腕を組んで考え始めた。

> どうしたのミソラ早くしないと遅刻するわよ？<

「……よし、決めた！！」

ミソラはスバルを起こさないように近づいてスバルの耳元に顔をちかずけ

「スバル、お・き・て？」
フー

小さいな声でささやいて最後に息を吹きかけた。

「う、うわーな、何するのミソラ！！」

スバルはびっくりして飛び起き、とてもあわてている。

「おはようスバル？」

ミソラは笑いながら挨拶をした。

ウォーロックとハープは必死に笑いをこらえている。

「スバル昨日の夜私のことからかったでしょ！？」

「ばれてたの？」

「スバルもまだまだたねー」

（スツゴいはずかしくてすぐ寝ちゃったけど）

「私さきしたいってるね？」

「うん、すぐいくよ」

スバルが支度をして下に降りていくと、茜がパートに行くところだった。

「あら、おはようスバル。ご飯作ってあるからミソラと食べちゃいなさい？」

「うん、いつてらっしゃい。」

「スバルー準備できたよー」

「うん、ありがとう」

スバルとミソラは朝ご飯を済ませ、準備をしてからやす達の家に向かった。

ピンポン

「はい」

スバルとミソラがやす達の家の呼び鈴を押すと中からゆきなが出てきた。

「いらつしゃい！委員長とキザマロはもうきてるよ。」

「やつぱりゴン太はいないか・・・」

スバルが小声でつぶやくと

「スバルも私が起こさなかったらまだねてるでしょ？」

ミソラがわざとらしく言った

「すいません・・・」

「ハハハ、ふたりとももう上がって。みんなまってるから」

「うん！！おじゃまします」

「ふたりともきたわね・・・後はゴン太だけね？全くもう委員長は少し不機嫌になりながらハンターを操作していた。」

「スバル、委員長つてあんな怖いの？」

委員長のイライラしている姿を初めて見た三人はスバルに小声で聞いてきた

「うん、まあね」

「し、聞こえますよ」

「キザマロ、お前も大変だな」

「いえいえもうなれましたよジャックくん。」

キザマロの苦勞した話を聞いている最中に委員長からの電話で起きたゴン太がきた。

この後委員長の説教が始まったのはいうまでもない。

「さて、今日集まったのはGW

の予定をたてるためだったわね。話がずれてしまったけど……」

「誰のせいだよ」

「何か言った、ジャック？」

「いや、何も」

委員長がすごい目でにらみつけつけてジャックを脅した。

「それで、今回の旅行は転校してきたやす君達に決めてもらおうと思っただけど、みんなどう？」

『賛成です』

「ならツカサ君からどこに行きたいところをいってって」

「僕みんなといければいいよ」

「俺も」

「私も」

「まかせるぜ」

「俺もだ」

「全く……ミソラちゃんは？」

「私もみんなと一緒にいければいいんだけど、たまたまマネージャーにナンゴク島のチケットをもらったの。」

「ナンゴク島ねー・・・決まりでいいかしら？」

『賛成です』

「ならこれからどこを見て回るか決めていきましょう」

その後、委員長の仕切りのもと旅行計画がたてられていった。

久しぶりの登校（前書き）

きりがいいところできるので短いです

久しぶりの登校

「久しぶりの登校」

スバル達みんなで行くナンゴク島の出発の前日。

スバルとミソラは家に迎えにきた委員長たちと学校に向かうところだった。

ジャックとツカサはWAXAの寮でお世話になっているため、学校にそのまま来るので一緒に行っていない。やす達は家の家事などを協力してからくるためギリギリに学校に登校して来る。なので時間に余裕を持って登校しているスバル達とは一緒にきていない。

それに、今日はいつもと違う。

いつもならすぐに校舎の中に入って自分の教室に向かう生徒がたくさんいるのだが、今日はみんな校庭に向かっている。

「あれ、何でみんなそっちに行くんだ？」

スバル、ミソラ、委員長、キザマロが当たり前のように校庭に向かっているのにゴン太だけは校舎の中に入って行こうとしていた。

「ゴン太あなたここにくるまでの私の話しきいてたの？」

「え、えーと……何だっけ？」

ズテツ

その場にいる全員が体制を崩した。

「はぁーキザマロ説明して」

委員長はあきれて説明をキザマロに頼んだ。

「はい！いいですかゴン太くん？今日は校庭でこの前の襲撃事件の説明があるんです。だからみんな修理が終わっている校庭に向かっているんですよ」

「わかった？」

「おう！！」

ゴン太は元気に返事を返した

「ならばやくいくわよ!!」

その後、校庭にいき自分たちのクラスごとに並んで待っていると、やす、ひろき、ゆきな、それにジャックやツカサがやってきた。

その後、校長先生が出てきて事件のことやスバルたちが戦ってくれたことWAXAと協力して対策をたてていくことや修理がどこまで終わったかななどの説明をされその日は放課になった。

「みんなあしたのこと覚えてる?特にゴン太」

「おう!!それは覚えてるぜ!!」

楽しみにしてたからな。」

「ならみんな大丈夫ね!」

『もちろん!!』

「それじゃ今日はみんな明日の準備もあるだろうから解散しましう!」

『了解!!』

その後、みんな準備のために家に帰って行った。

くスバルの家く

「「ただいまー!」」

「お帰りなさい。明日の準備するんでしょ?鞆出しといたわよ。」
茜は指さしながらいった。

「ありがとう母さん」

「うわーかわいい♪」

スバルがとったのは濃い青色をしたリュック、ミソラのとったのはピンク色をしたリュックだった。

「ふふ、明日は楽しんできなさい!?」

「「うん!!」」

その後、二人は楽しそうに明日の準備をして、早めに寝た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9484r/>

流星のロックマン～エレメント～

2011年12月10日22時55分発行